

HIMARAYAN
EXPEDITION 89

ネパール・ヒマラヤ
探検報告書

ネパール・ヒマラヤ探検報告書

1989年12月15日発行

編集.....小嶋健太・田村康一

印刷.....小島プリント

0468(53)8403

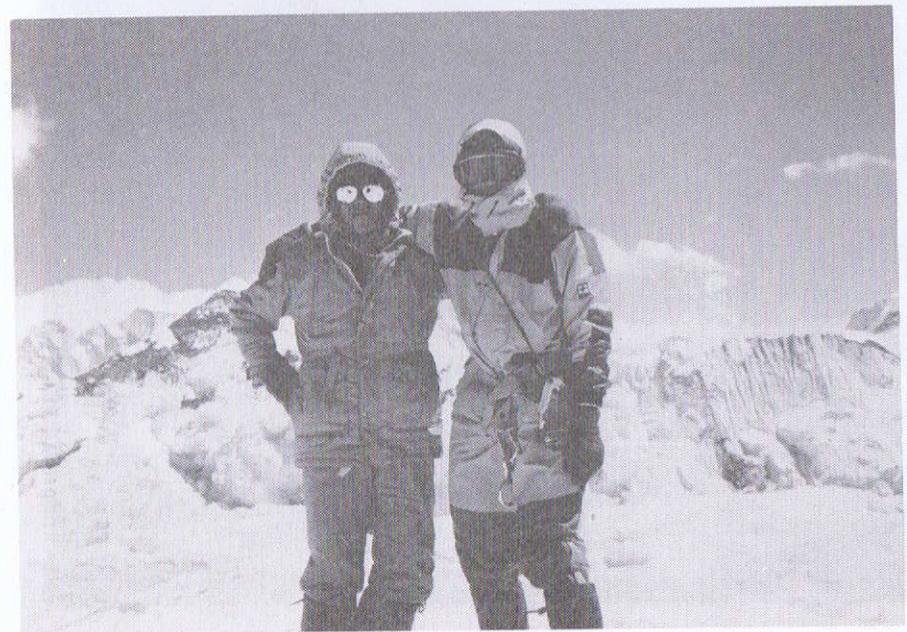
発行.....横浜市立大学探検部

横浜市金沢区瀬戸2-2

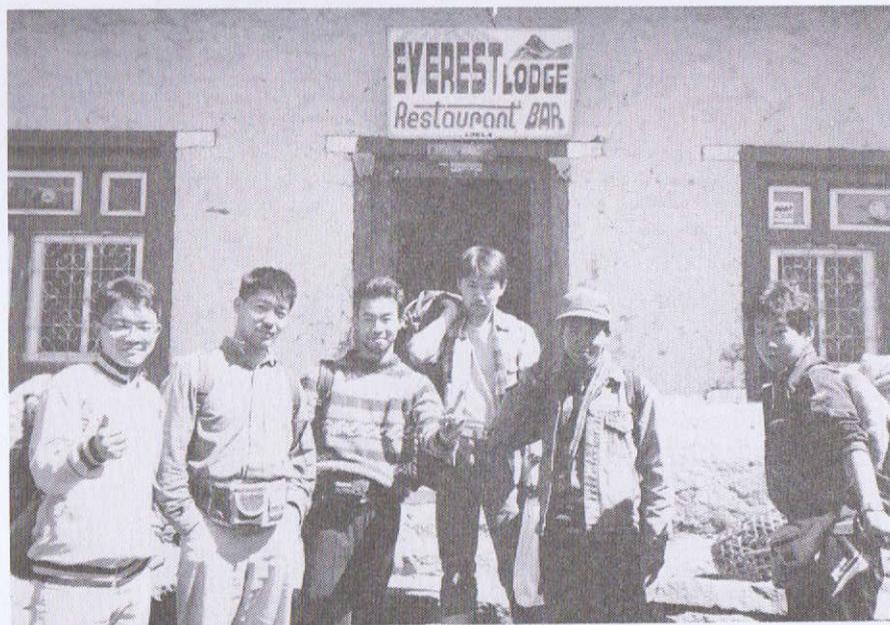
横浜市立大学探検部



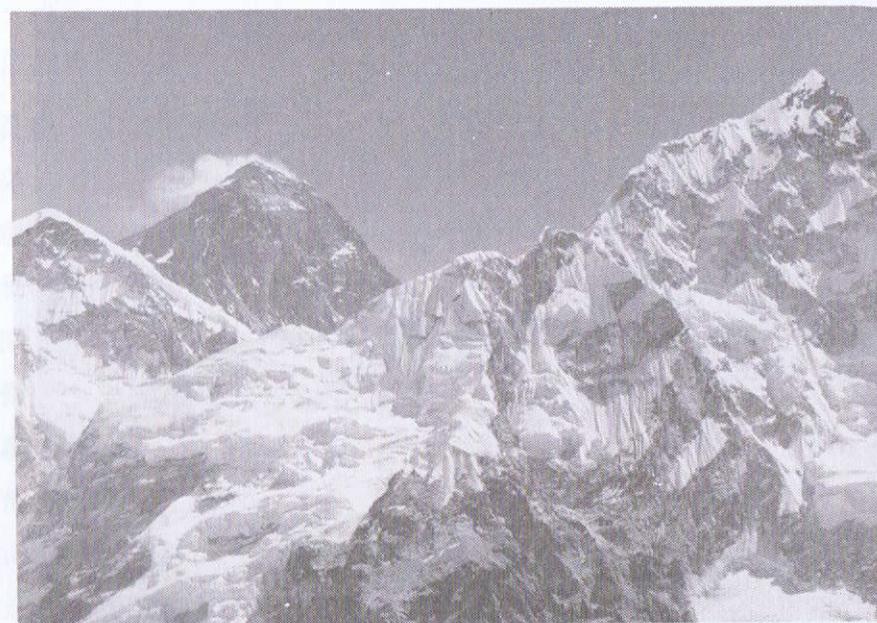
アイランド・ピーク(6189m)



アイランド・ピーク山頂に立つ高梨(右)とドルチェ



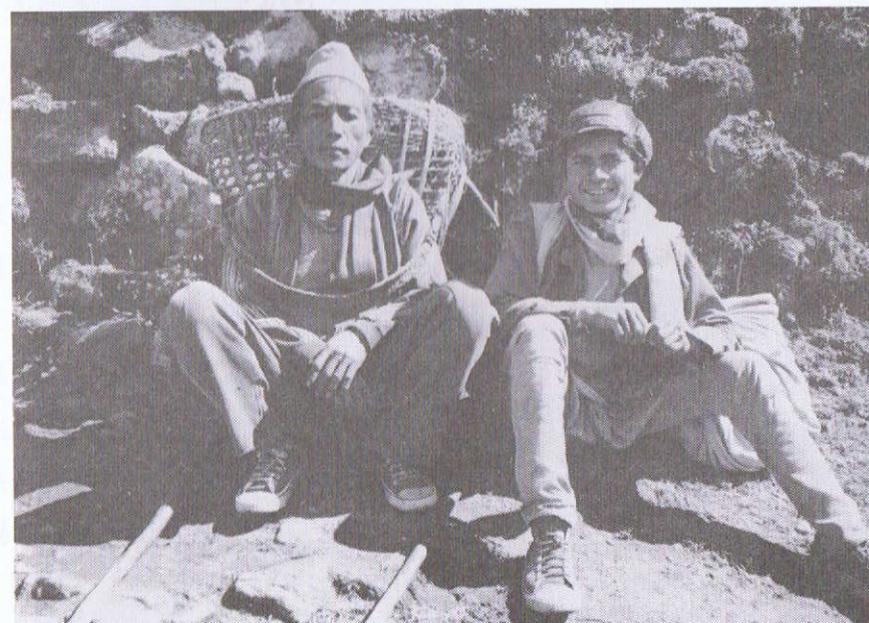
2月27日 ルクラに全員集合



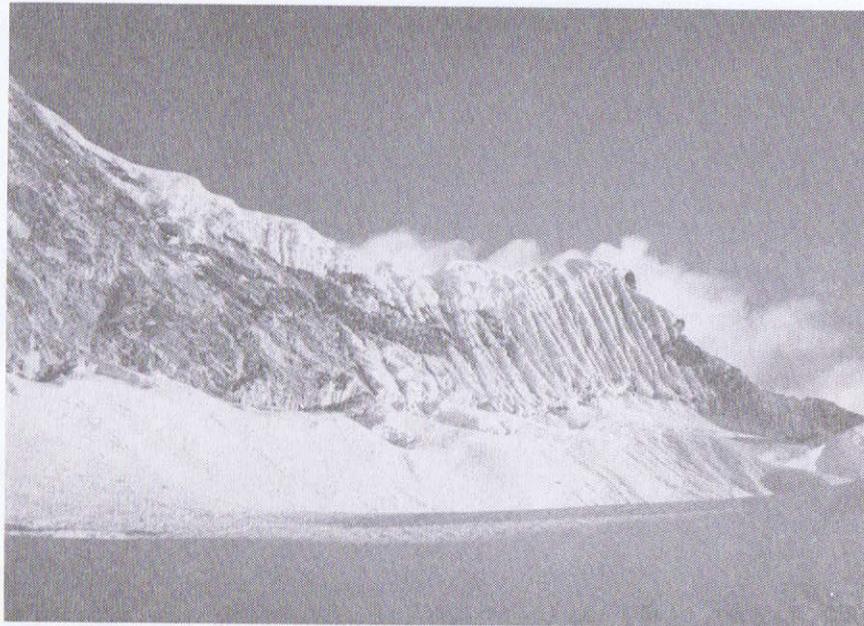
エベレスト(左 8848m)とヌプツェ(7855m)



ナムチェ・バザール



田舎者ともスヌワール族のポーター



アイランド・ピーク山頂直下の雪壁



4700mのチュクンで空手の演武をおこなう常世田

目次

はじめに	1
隊員紹介	2
出発までの経過	5
日程表	7
行動記録	9
地図	18
装備	高梨洋之 19
食糧	種子田幸太郎 23
医療	小嶋健太 29
高山病について	小嶋健太 31
輸送	小嶋健太 36
渉外	田村康一 38
アイランド・ピーク登頂記他	高梨洋之 42
シェルパ	田村康一 46
フィールド・ノートから	種子田幸太郎 49
ヒマラヤ雑感	小嶋健太 50
4700Mの抜塞大	常世田泰正 53
ヒマラヤ随想	大沢啓志 57
総括 1	高梨洋之 62
総括 2	田村康一 64
ヒマラヤへの憧憬	朝比奈大作 68
Himaraya, Dudh-kosi, Lobche-kholaにおける 生物学的(水生昆虫・付着藻類)調査	大沢啓志 70
会計	大沢啓志 78
協力者名簿	79

はじめに

探検部の1984年度主将で、良き先輩だった大谷直士さんが亡くなられたのは、去年の10月23日だった。ちょうどそのころ、わたしたちは“ネパール・ヒマラヤ探検計画”を実現させるべく、精力的に準備をすすめていた最中で、大谷さんの突然の死は、そんなわたしたちに大きな衝撃をあたえた。

大谷さんの功績は、彼のわたしたち後輩にあたえた影響のみをかんがえても、はかりしれないものがある。1985年のマニラのスラム調査が、その後現在にいたる、探検部のフィリピン遠征の先駆けとなったのは周知の事実であるし、今回わたしたちが、ヒマラヤ行きを計画するにいたったのも、大谷さんが継承してくれた、冬山における氷雪技術の裏付けがあったからである。また、なににもまして貴重なのは、未知のフィールドを切り開いていくという、探検部員としてのスピリットを強烈に植えつけてくれたこととおもう。韓国自転車行、フィリピンスラム調査、冬山のルート開拓といった、それまでの探検部の守備範囲外にあった活動を次々に展開していった大谷さんの存在が、わたしたちがヒマラヤという新たなフィールドに挑むうえでの、おおきな精神的支えとなったのである。

大谷さんのお葬式から4カ月たった1989年2月、わたしたちはそれぞれの決意を胸に、ヒマラヤへと旅立った。そして、アイランド・ピーク登頂をはじめとする、当初の目標をある程度達成し、全員無事に帰国することができた。この報告書は、そんなわたしたちの体験の、ごく一断片をまとめたものである。

ささやかながら、この『ネパール・ヒマラヤ探検報告書』を、今は亡き大谷さんにささげる。

1989年10月30日

横浜市立大学探検部 ネパール・ヒマラヤ探検隊

隊員紹介



隊長 渉外 田村康一(22) 文理学部文科4年

本計画の推進役。探検部では“山嫌い”で通っていたが、なぜかヒマラヤくんだりまでいってしまうという節操のなさ、あきらめの良い淡泊な性格が売りものである。キャラバン中は一人になったのをいいことに、シェルパの地酒を飲みまくり、二日酔いとも高山病ともつかない状態で歩きつづけた。過去にフィリピンでの民族探検や、無人島生活実験などの活動がある。



副隊長 装備 高梨洋之(22) 商学部経済学科4年

持前の馬力と粘り強さで、唯一の登頂者となる。“山の遊撃手”の異名を欲しいままにしていたが、卒業後、海に転身した。好きなことばは“輝け!!青春”。かつて彼が“進出”した地域には、比島、中国大陸、マレーシアといった、第二次世界大戦における、日本軍ゆかりの国々がある。普段は温厚な男であるが、酒がすぎると豹変して、乱暴狼藉をはたらくのが玉に疵である。



食糧 記録 種子田幸太郎(22) 文理学部文科4年

中国拳法八極拳の使い手で、格闘技に詳しい。スパーリングと称して、隊員の小嶋を痛めつけている。一見さわやかな好青年ふうであるが、実際は格調低い言動でしられている。ヒマラヤには独特の“きこりスタイル”で登場。その素朴で暖かみのある風貌で、他のメンバーを笑わせた。カトマンズで解散後、タイのビーチに直行。その本領をいかんなく発揮したといわれている。



会計 気象 大沢啓志(21) 文理学部理科3年

“風の吹くまま気のむくまま、TITP大沢少年”という、わけのわからないキャッチフレーズをもつナチュラルリスト。常にマイペースで行動し、今回も他のメンバーから離れてエベレスト方面へ藻類の採集にいった。ただ一人の生物科学生であり、実験その他でいつも忙しそうにしている。



装備 医療 小嶋健太(22) 文理学部文科4年

出発前に浮かれすぎ、個人装備一式を忘れてしまったおっちょこちょい。一見しっかりものの印象があるが、以前にも冬山合宿で同じことをやった忘れものの帝王。高度に強く、体力もなみはずれていたのに、シェルパからはイエティ(雪男)と呼ばれ恐れられていた。解散後に立ち寄ったインドで荷物を、タイで有り金全部を盗まれて、裸一貫帰国した。



特別参加 常世田泰正(22) 文理学部文科4年

元空手部副将の彼は、卒業旅行をどこに行くか決めかねていたところ、ポーターとして白羽の矢が立ち、わけのわからないままヒマラヤに連れていかれ、ご用済みになったところで山奥に置き去りにされてしまった。また、真っ先に高山病の症状がでたため、利尿剤の臨床実験台にも使われて、副作用ですっかり色黒になってしまったというあわれな男。



サーダー ドルチェ・シェルパ(24)

一見つっぱり風のいい男。体力、登山技術、マネジメント能力と、三拍子そろった有能なガイドであるが、酒、女、ばくちと、こちらのほうも三拍子そろっている。登頂の翌日も勢いにかけて、トレッキングにきていた日本人ギャルにアタック。「今宵は良い夢がみられそうです」とのたまったが、二度目の登頂にはいたらなかったようである。過去にアンナプルナ、カンテガ、チャムランなどの遠征隊に参加している。



コック ハクシー・シェルパ(24)

「BCではコックが必要」というドルチェの一言で参加が決めた。彼の作る料理はなかなか好評で、高山病に悩む隊員たちをよろこばせた。彼自身も高度障害による顔のむくみがひどく、アンパンのような顔でがんばった。ドルチェと違って酒も女もばくちもやらないまじめな男と思われていたが、同じ仕事の少年タキとの仲が発覚し、センセーションをまきおこした。



コック見習い タキ・シェルパ(21)

ハクシーのたつてのたのみで、ポーター兼コック見習いとして雇うことにした。21才にしてはまだあどけなさの残る童顔である。足が悪いため、ガイドではなくコックをめざして修行をつんでいるとのふれこみであったが、道中、ハクシーと抱き合っているところを目撃され、波紋をよんだ。せっかく稼いだ給料を、ばくちですってしまい、半べそをかいていた。

出発までの経過

1988年 9/16

探検部部会にて、田村、高梨、大沢がヒマラヤ遠征計画を正式に提案。地域はネパール、パキスタン（ヒンズークシ）、インドのいずれかから、アプローチ、予算、山域の魅力、国の政情など種々の事情を考慮したうえで決定するとした。目的は、登山と学術調査(生物等)である。今春、ネパールでトレッキングをおこなった部員の本多から、現地の事情説明をうける。

9/29

資料の入手できたネパールとパキスタンのみ、予算見積もりをおこなう。資金的な理由から、この時点でネパールゆきが決定する。6000メートル級の未踏峰をねらう方針である。種子田の参加が決定。

10/6

東京都山岳連盟発行の『海外登山の手引』などで調べた結果、未踏峰を登るためには日本山岳協会の推薦状が必要だったり、外務省を通してネパール政府に申請しなければならないなど複雑な手続きが必要と判明。また、登山者に人気の高いネパールでは、6000メートル峰とはいえ、未踏峰などは残っていないと判断し、目標を変更。簡単なトレッキング許可で登ることのできる6000メートル峰18座のなかの一つを選ぶことにする。

10/20

エベレストのあるクーンブ山群のなかの、メラピーク(6654m)、クスムカングル(6367m)、アイランドピーク(6189m)を候補とし、それぞれの情報を集めることにする。鈴木が参加が決定。

11/7

アイランドピークについての情報を、横浜蝸虫山岳会の加藤氏から収集。彼によると、技術的な問題はさほどない山であるとのこと。その他、トレッキング・エージェントのアトラストレック佐々木慶正氏の紹介をうける。

11/17

鈴木が『岩と雪』編集部より、メラピークの資料を入手。また、メラピークとアイランドピークの両方を登っている『岳人』編集部の山本氏を紹介される。この時点でアプローチの容易な、アイランドピークに決定する。

11/25~27

富士山にて、雪上訓練をおこなう。参加者(高梨、田村、鈴木、種子田、大沢、大槻)

11/30

旅行代理店H I Sにて、先発隊の田村、高梨の航空券を予約(パキスタン航空)。また、アトラストレックにて、本隊三人の航空券を確保(インド航空)。

12/2

朝日新聞横浜支局に後援依頼。

12/4

BCまでのサポート要員として、常世田の参加が決定。

12/8

長田病院にて、医薬品の援助を依頼。高梨、鈴木が探検会理事会に出席し、後援ならびに資金援助願いをおこなう。その申し出は承認される。

12/12

高梨、鈴木が岳人編集部の山本氏と会い、情報収集をおこなう。

12/14

朝日新聞横浜支局の後援がきまる。後援内容は、計画書等への名義の使用、紙面提供(出発前、帰国後の二回)、フィルム援助(カラー、白黒各20本)である。

12/16

探検部顧問の朝比奈先生と、探検会事務局の高松氏に、学生課に提出する計画の推薦文を書いてもらう。学生課に計画書とともに提出、受理されたことにより正式に部としての活動として承認される。

12/26~30

ハヶ岳において、氷壁、岩登りなどの強化合宿をおこなう。参加者(高梨、鈴木、田村、種子田、大沢)

1989年 1/18~22

ハヶ岳で二度目の合宿をおこなう。参加者(高梨、鈴木、田村、種子田)。20日、赤岳北峰リッジにおいて鈴木が滑落し、腰椎を骨折する。鈴木は入院し、遠征への参加が不可能になる。

1/24

一部の部員から、事故をおこした責任上、計画を自粛すべきではないかとの声があがり、OBの鈴木元章氏を交えて、緊急の話し合いをおこなう。田村が計画の続行を強く主張し、受け入れられる。また、鈴木に代わり、小嶋が参加を申し出、承認される。

2/11

田村、高梨の先発隊が、成田を出発する。

2/18

小嶋が出発。

2/22

本隊(種子田、大沢、常世田)が出発。



行動記録

2/11(土)

田村、高梨の先発隊は、成田空港を出発。出国時の検査で、田村は寝袋に包んで隠しもっていたEPIのガスポンベを没収されるが、高梨は堂々と手荷物に入れていたために、発見されずにすんだ。現地時間で23時にバンコクに到着し、タクシー代とホテル代をおしんで空港でビバークする。(田村)

2/12(日)

バンコク市内で、ラーメンなどの食糧買い出しをおこなう。物価は日本の1/2~2/3程度で、これからヒマラヤ等に遠征する場合は、タイである程度物資を調達すると、経費が節減できてよいだろう。(高梨)

2/13(月)

バンコクを出発し、ネパールのカトマンズにむかう。荷物は2人あわせて48kgで、8kgのオーバーである。だが、超過料金はとられなかった。1人あたり5kg程度の超過は、見逃してくれるようだ。

天気はよく、飛行機の窓からヒマラヤがみえる。16時にカトマンズ着。空港で15日間有効のビザを取得する。ネパールでは写真を1枚用意しておけば、空港でもビザを取ることができる。空港で両替すると、1ルピーが約5円であった。

タクシーで市内に入り、ホテルにチェックインする。夜は少し寒い。(田村)

2/14(火)

自転車で市内のトレッキング・エージェントをまわる。コスモ・トレックの大津さんに、予算の見積もりをしてもらった。予定よりかなり高くなりそうだ。アイランド・ピークは、「技術的にはさほど問題はないが、慣れない人にとっては、高度に順応するためのペース配分が難しい」とのことである。

カトマンズは一国の首都とは思えないくらい、小ぢんまりとした町だ。古いレンガ造りの家が立ち並び、インド系の住人たちはとてもエキゾチックな顔立ちをしている。道端の物売りが少々うるさい。ヤミ両替でお金をかえると、銀行のレートよりもはるかに良く、100ドル=2925ルピーであった。(高梨)

2/15(水)

コスモ・トレックで、シェルパのドルチェを紹介され、一緒に昼飯を食う。彼はシェルパのイメージからかけはなれた、つっぱり風の髪形とあかぬけた服装の持主である。最初はいやな奴かとおもっていたが、話をしてみるとなかなか誠実そうな男であった。その後、ヒマラヤン・ジャーニーの大河原氏から、高山病に関するレクチャーをうける。カトマンズには、川下りにきていた同志社の探検部の連中が滞在していたが、皆体調を崩し、1日に1人ずつ倒れていっているとのことであった。高梨も、やや腹の調子がおかしい。(田村)

2/16(木)

キャラバンの出発点、ジリまでバスで移動する。車窓から時折バナナの木が見え、ここが亜熱帯であることを実感させられる。ヒマラヤの山並みとバナナの木のとりのあわせは、なんだか不思議である。

バスはひどく混んでいるうえに、きついカーブや上り下りを何度も繰り返す。ジリに到着するなり、体調を崩していた高梨はダウン。田村も車よいで、気分が悪くなった。なお、この日キッチン・ボーイのハクシーと合流する。(高梨)

2/17(金) 快晴 8:00、11℃ 12:00、23℃ 16:00、19℃

キャラバン開始。高梨の調子が回復したので、11:50から出発、シバラヤへむかう。ジリでスヌワール族のポーター二人を、1日100ルピー(1人)でやとう。荷物をポーターがほとんど担ぐので、ディバックのみの軽装となり、まるで大名旅行である。夕方16:20、シバラヤに到着。道は整備されており、いたるところにバッチィ(茶屋)があるので、行動食の必要はない。ただ、空気が非常に乾燥していて喉が乾くので、テルモスにお湯を入れておいたほうがいいようだ。(田村)

2/18(土) 曇り時々雨のち雪 8:00、9℃ 12:00、10℃ 16:00、9℃

高梨の調子がおもわしくないため、停滞する。昨夜から下痢と嘔吐の繰り返しである。ハクシーとポーターは、停滞せずに先に進んだ。この日、小嶋が日本を出発。(高梨)

2/19(日) 曇り時々雨のち雪 8:00、8℃ 12:00、7℃ 16:00、8℃

高梨は下痢が悪化したため、カトマンズに引き返す。以後、田村が1人でキャラバンを続行する(9:30出発)。17:20キンジャに到着。午後から天気が崩れるので、行動は速めに終わらせたほうがいいようだ。(田村)

2/20(月) 晴れのち曇り 8:00、9℃ 12:00、28℃ 16:00、6℃

朝方は快晴で、久しぶりにヒマラヤが見える。8:20出発。14:30ゴヤンに到着。ここはシェルパ族の集落である。雪が数十センチつもり、日が落ちてからは猛烈に寒い。この日、小嶋がカトマンズに到着。(田村)

2/21(火) 曇りのち雪 8:00、3℃ 12:00、2℃ 16:00、4℃

9:05出発。14:20ジュンベシ着。途中、ルクラまでの道程でもっとも標高の高い、ラムジュラ・バンジャン峠(3530m)を通過する。積雪は1メートルくらい。

運動靴、綿の靴下、Tシャツ、ジャージにダウンジャケットという軽装の割に寒さを感じないのは、雪の積もりぐあいのわりに、気温が高いせいだろうか。現地人は、ボロボロのズックを素足にひっかけ、平然と歩いている。(田村)

2/22(水) 晴れのち曇り 8:00、3℃ 12:00、16℃ 16:00、6℃

8:20出発。16:05タクシンド到着。今日はクーンブ・ヒマラヤの山々をのぞむこ

とができた。その迫力は、日本の冬山とは比較にならないスケールである。

雪が降って道が悪くなってきているので、ポーターがこれ以上先に進むのを嫌がっている。(田村)

本隊メンバー(種子田、大沢、常世田)は、成田空港を12:00に出発。現地時間の18:00にバンコクに到着する。鉄道を使って市街に入り、マレーシア・ホテル周辺の安宿、“Lee Guest House”にチェックインする。バンコクではマレーシア・ホテル周辺か、王宮近くのカオザン・ロード界隈に、安宿が集中している。(種子田)

2/23(木) 晴れのち曇り 8:00、3℃ 12:00、16℃ 16:00、6℃

[先発隊] 10:45出発。12:00マニディンマに到着。ポーターは、「1日の行程を短くする。1日100ルピーの給料を130ルピーに上げる」という条件で、ようやく動いてくれた。マニディンマは雪がとけていたので、子供たちに手伝ってもらって、昆虫採集をする。でてくるのは、小型の甲虫類ばかりで、朝比奈先生(昆虫好きの探検部顧問)のがっかりする顔が目に見えようであった。(田村)

[本隊] リコンファム(予約の再確認)のために、航空会社をまわる。まずSOGOデパートへの六階にある、インド航空へ行く。無事に手続きを終える。次にロイヤル・ネパール航空のオフィスへ。常世田はここで、3月9日だった帰りのカトマンズ～バンコク間の予約を、3月15日に変更した。(大沢)

2/24(金) 快晴 8:00、2℃ 12:00、30℃ 16:00、13℃

[先発隊] 9:20出発。14:30カリコラに到着。今日のコースは標高が低いせいか、雪は全く見られなかったが、ひどい暑さでまいった。気象の変化が非常に極端で、体調の維持には気を使う。なお、今までシェルパの集落ばかりであったが、今日はライ族の村ジュビンを通過した。この辺の民族は、高度による棲みわけをおこなっているようだ。(田村)

[本隊] 13:25にバンコクを出発。15:30にカトマンズに到着する。空港には小嶋が迎えにきていた。入国検査では、ザックの中身をすべてだされ、種子田は怒り狂っていた。タメル・ストリートにある、高梨の泊まっていたヒマラヤン・レストハウスに宿をとる。久々に見る高梨は、げっそりやつれていた。

ルクラ行きの飛行機は、雪でルクラの飛行場が使えないため、ここ一週間ばかり飛んでいないらしい。先発隊が15日に会ったという同志社の探検部は、ずっと足止めをくって、まだカトマンズでぶらぶらしている。明日、小嶋は朝一番の飛行機でルクラに向かうそうだが、果して飛行機は飛んでくれるのだろうか。

(常世田)

2/25(土) 晴れ 8:00、9℃ 12:00、24℃ 16:00、13℃

[先発隊] 7:45出発。16:00スルケ着。峠からの下りは北面のためか、残雪があり、おまけに氷化していて非常に怖い。今日中にルクラにつく予定だったが、ポーターがなかなか到着せずスルケ泊まりとなる。(田村)

[本隊] 飛行機はなんとか飛べたらしい。よかった。今日は終日フリーで、みん

な自転車を借りてサイクリングとしゃれこんだ。カトマンズの町はほこりっぽくてゴミゴミしているが、なんとなく気にいった。何ととっても、町なかから、ヒマラヤの山々が見えるのが素晴らしい。(種子田)

2/26(日) 晴れ 8:00、8℃ 12:00、21℃ 16:00、13℃

[先発隊] 8:20出発。9:45ルクラ着。カトマンズをでて11日目にして、ようやくルクラにたどりついた。これで先発隊の役目は終了である。ラルバードルとチェットバードルの両ポーターに給料を支払い、解雇した。ここから先は、さらに日当の高いシェルパ族のポーターを雇わなければならない。

昼食後、昆虫採集をしているときに、飛行場の滑走路を散歩している妙な男を発見した。どこかで見た顔だと思って近づくと、それは小嶋であった。(田村)

[本隊] ヒマラヤン・ジャーニーで、ルクラ行きの航空券と、トレッキング許可証を受け取る。明日のフライトは、高梨が7:00発で、他の者は9:00と非常に早い。朝はちゃんと起きられるだろうか。

昼食のダルバート(ネパール風カレー定食)は至極まずいしろものだった。しかし、悲しいかな腹一杯食べてしまい、気持ち悪くなる。口直しに食べたヨーグルトはおいしかった。(高梨)

2/27(月) 快晴 気温の記載なし

高梨は朝一番の飛行機で、残りの3人は2番目のフライトでルクラへ飛んだ。この飛行機は“落ちるまで飛ばす”といういわくつきの代物で、ヒラリー(エベレストの初登頂者)の奥さんはこのセスナ機の墜落でなくなったそうだ。

かなり揺れはしたが、飛行機は無事ルクラに到着した。滑走路は段々畑の間にある、ガタガタのじゃり道である。着陸に成功した瞬間、思わず拍手が巻き起こった。これで6人全員が合流したわけだ。ポーターをかき集め、12:00にさっそくキャラバンを開始する。途中、ガイジン(白人のこと)のトレッカーとよくすれちがう。14:30パグディンマに到着。

宿の隣の沢で、みんな頭を洗う。ヒマラヤの雪解けの水はさすがに冷たく、頭が割れそうに痛い。夕方、チャン(どぶろく)を飲みながら、田村がオリジナルの比較猥談学を披露する。(大沢)

2/28(火) 快晴 8:00、5℃ 12:00、17℃ 16:00、18℃

7:00起床。キッチン・ボーイのハクシーが、ミルクティーをもってきてくれる。8:35パグディンマを出発。それぞれのペースでばらばらになって歩く。ナムチェ前の高度差590メートルの急登は、なかなかきつかった。この急登で高山病の症状が出る人が多いらしい。

ナムチェは谷間の斜面に広がる町だ。シェルパ族の交易の中心地として知られ、毎週土曜日に開かれるバザールには、周辺から大勢の人が集まり、賑わっている。

この日は風が強く、カラスが、風にひらひらと舞っていた。(種子田)

3/1(水) 快晴 強風 8:00, 8°C 12:00, 記載なし 16:00, 10°C

今日は高度順化日のため、ナムチェで1日停滞である。装備点検をすると、BCでの食糧がかなりと、フィックス・ロープ、スノーバーが足りない。足りない分の調達は、ほとんどドルチェがやってくれた。

昼食後、高度順化のために標高4000メートルくらいの近くの丘に登る(ナムチェは標高3440メートル)。このとき常世田は、頭痛などの軽い高山病の症状を訴えた。ヒマラヤン・ジャーニーの大河原氏にすすめられた、利尿剤のダイアモックスを服用する。

夕方、常世田はアメリカ人のおばさんに、利尿剤を飲んだことをえらく馬鹿にされた。彼は怒っていたが、英語が苦手なので対抗できないようだ。(小嶋)

3/2(木) 快晴 気温の記載なし

日中は汗がでるくらいの陽気だが、日没とともに一気に冷え込む。9:30にナムチェを出発。サガルマタ(エベレスト)国立公園の入り口で、トレッキング許可証とアイランド・ピークの登山許可証をチェックされ、サガルマタやローツェを正面に仰ぎ見ながら歩く。吊橋を渡ってからの長い登りは、みんな苦しそうだ。

15:40タンボチェに到着する。タンボチェのゴンバ(寺院)は、つい最近火事で焼けてしまったそうで、門とストゥーパ(仏塔)くらいしか残っていない。休憩後、小嶋は近くの小ピークに登り、他の者は広場で空手の練習をした。

夕食は注文したものがなかなかでこず(1時間以上かかった)、隊員一同、怒り心頭にたっした。

現在、皆の最大の関心事は、食事についてである。(高梨)

3/3(金) 快晴 8:00, 4°C 12:00, 16°C 16:00, 14°C

出発前に田村、高梨、種子田、常世田の4人は、利尿剤のダイアモックスを服用した。9:10出発。途中パンボチェを通過する。ここのゴンバには、「雪男の腕」が保存されているらしい。ドルチェによると、雪男は「昔はいたが今はなくなった」とのことである。15:00ディンボチェ(4400m)に到着。

そろそろ高山病にかかる者がではじめる。常世田は確実。田村は自称高山病。種子田の食欲も減退気味で、ほおがこけてきた。元気なのは高梨と小嶋で、日本でハングリーな生活を強いられている小嶋は、こっちへきてから逆に太ったようだ。明日から大沢は、本隊から離れて単独行動をとる。(常世田)

3/4(土) 晴れ夕方曇り 8:00, 5°C 12:00, 9°C 16:00, 7°C

9:30出発。大沢は一人で、エベレストBC方面へむかう。本隊は左にローツェ南壁、右にヒマラヤひだをつけた無名峰、そして正面に目指すアイランド・ピークを仰ぎ見ながら、イムジャ・コーラの左岸をだらだらと登る。11:30チュクン(4700m)に到着。ここで常世田が空手の演武を疲労し、フラフラになる。

昼食は初めて、キッチン・ボーイが腕をふるい、ラーメンとパンケーキをつくった。昼食後、大相撲ヒマラヤ場所が開幕。国技の威信をかけて、シェルバのドルチェ

と対戦した高梨は、あっさり土俵外へ突き倒された。さすがに5000m近い高所での相撲は疲れる。就寝前、種子田と小嶋は風邪薬をのむ。種子田は相変わらず食欲がない。夜、常世田が寝言で「もしもし、わたし、今なにしTEL?」と、薬師丸ひろ子のもまねををしていたのは無気味であった。(田村)

3/5(日) 快晴 8:00, 2°C 12:00, 16°C 16:00, 8°C

9:20出発。種子田は体調不良のため、チュクンに停滞する。12:15高梨、小嶋がパレシャヤ・ギャブ(5100m)に到着。BCを建設する。なんと二人は、このときまでアイランド・ピークを遥か前方の真っ白な山だと勘違いしていた。すぐ左手の山を、「これがアイランド・ピークだ」と教えられて、呆然とする。

13:10田村、常世田が到着。常世田はひどい頭痛に苦しんでいる。しばらくテント内で休ませたあと、高梨がつきそってチュクンに下らせることにする。ポーター4人も、今日かざりて下山するということだ。

夕方から、田村と小嶋はルートの偵察と高度順化をかねて、300メートルほど登る。それにしてもパレシャヤ・ギャブとはひどいところだ。ゴツゴツと岩が露出し、その上を強い風が絶え間なくふいている。まさに“地の果て”といった感じである。(高梨)

3/6(月) 晴れ(終日強風) 8:00, -1°C 12:00, 15°C 16:00, 5°C

7:25 起床。昨夜は寒さのため、よく眠れなかった。8:30 朝食のおかゆとラーメンを食べる。おかゆはネパール風なのか、砂糖で味付けしてあり、食べるのに難儀する。田村はタイ製ラーメンの油が鼻につくようになり、少ししか食べられない。9:30「だめです。登れません」の一言を残し、昨夜まで元気だった小嶋が荷物をまとめ、チュクンへ下ってゆく。ここへきて、下痢、吐き気などの高山病の症状が一気にでできたようだ。田村は予定していた荷上げを一人でやらなければならないのかと、途方にくれる。11:45 高梨がチュクンよりBCに上がってくる。調子はすこぶる良いようだ。

昼食後、田村、高梨、ドルチェの3人でアタック計画を練り直す。

《アタック計画》

3/7 AC(アタック・キャンプ)予定地に、高度順化を兼ね、登攀具を荷上げする。

3/8 早朝より、BCからのラッシュ・アタックをかける。強風の場合は停滞する。

3/9 第2次アタック。

3/10 第3次アタック。

第1次アタック成功のさい、2、3次のアタックをおこなうかどうかは、隊員の体調次第とする。第1次アタックは、田村、高梨ドルチェの3人。明日(7日)BC入りする予定の種子田は、体調次第で第1次アタック隊員に加える。なお、すべてBCからのラッシュ・アタックとする。

[ACをつくらない理由]

- 1 AC予定地は強風のため、キャンプの維持が困難。
- 2 残る日程(4日間)で、ACを建設してからのアタックは、2回が限度である。天候のこともあるので、なるべくアタックの回数を多くしたい。
- 3 ACへの荷上げの困難さを考えると、その分の体力を温存してラッシュ・アタックにかけたほうが良い。

13:00 荷物運びのヤクと、その飼い主がディンボチェに下る。第1次アタック後の9日に、再び上がってきってもらうことにする。14:00 AC用にとっておいたエスパーズの4人用テントを張る。さすがに居住性が良い。オーストラリア人の登山者が、ガイドのシェルパを伴ってBCに上がってくる。明後日、アタックの予定らしい。18:00 夕食。みそ汁、ごはん、タルカリ(カレー味)。田村はごはんが食べられない。どうやら、炭水化物類に体が拒絶反応をおこしているようだ。高梨はそんな田村を尻目に、ごはんのおかわりをした。20:00 就寝。(田村)

3/7(火) 晴れ(西空に雲が多い) 気温の記載なし

6:30 起床。寒さのため安眠できない。田村は利尿剤の影響で、夜間3回トイレに起きた。8:00 荷上げする登攀具を点検する。朝食はおかゆとラーメン。田村は相変わらず、ラーメンを食べることができない。9:20 荷上げに出発。高度のためかすぐ息があがり、ドルチェに引き離されてしまう。11:00 ガレ場の岩棚にて休む。その後、ルンゼに沿って登るが、所々氷化した雪が残っていて、運動靴だと少々怖い。11:30 ルンゼから右手のリッジにでる。ここが最初、ACに予定していた地点(5600m)である。4人用テントなら、2張りくらいは設営可能だ。田村と高梨は、一気に高度を上げたために無理をせず、ここから雪線(5800m)までの荷上げは元気なドルチェに頼む。

12:10 下山開始。ドルチェはポケットに手を突っ込んだまま、かけ下って行く。12:50 BCに到着。13:00 種子田がキッチンボーイのタキとともに、BCに上がってくる。17:00 明日のアタックについて、最終ミーティングをおこなう。種子田は、アタックに加わる予定。18:30 夕食 田村と種子田は、食欲減退のためジフィーズの牛飯を作るが、匂いが鼻について食べられず、かえって裏目にでた。高梨はタイ製ラーメンに餅を入れて食べる。食欲は旺盛だ。20:30 就寝。

田村、種子田は、BCの高度にうまく順応できていないため、食欲不振で体力の減退が著しい。チュクンに下った小嶋の調子も良くないようだ。明日は、午後からの天候悪化をさけて、2:30起床、3:00出発の強行軍となる。なお、BCで会ったオーストラリア人のフィリップは、明日一緒に登ることになった。(高梨)

3/8(水) 晴れのち曇り夕方から雪 気温の記載なし

2:30 起床。種子田は頭痛を訴える。3:10 ヘッドランプをつけて出発。種子田はアタックを見合わせたため、メンバーは田村、高梨、ドルチェ、フィリップ、ア

ン・フリ(フィリップのガイド)の5人である。ペースが非常に速く、息苦しい。心臓が破裂して飛び出しそうである。6:05 雪線(5800m)の手前で休憩。プラスチックブーツにはきかえ、アイゼンを装着するが、低酸素のために動作が緩慢になり、片足に30分かかかる始末である。

7:00 出発。ここからアンザイレンをして登る。両側が切れおち、雪が氷化しているリッジは非常に怖い。リッジを通り過ぎ、広い雪原歩きとなるが、クレバスが至るところに隠れており、気がぬけない。少休止のときに、不注意に雪上に腰をおろしたフィリップは、そのヒドゥン・クレバスにつかまった。私達は呆然とそれを見送っていたが、体半分ほどずりおちたところで、アン・フリに助けられ、事なきを得た。7:30 最後の難関、約100メートルの雪壁のとりつきまでようやくたどりつく。手前の雪原でアンザイレンを解除する。田村と高梨は、とてもトップでルートを開くパワーはない。不本意ながらドルチェとアン・フリにルートワークを任せてしまう。特に田村は、疲労に空腹がくわわり、動けなくなってしまったので、以降の登攀を断念する。高梨のみ、シェルパの後を追って氷化した雪壁にとりつく。

11:27 高梨、ドルチェ、フィリップ、アン・フリの4人は、アイランド・ピーク山頂に立つ。12:00 下山開始。雪壁を懸垂下降でおりる。12:30 雪壁下降終了。とりつきで休んでいた田村と合流する。このころから、高梨の頭痛が激しくなる。

12:50 雪線終了。下りの雪原はアンザイレンをしなかったため、クレバスに落ちやしないかと心配であった。ここの休憩でドルチェがフルーツ缶をあけた。食欲はないが、喉が非常に乾いていたため、無理に流し込む。その後、再び下山をはじめたが、疲労と割れるような頭の痛みのために、平坦な所を見つけては横になって休んだ。

15:50 BC到着。雪が降り始める。種子田と、今日BCに上がってきたばかりの小嶋が、心配して待っていた。高梨はテントにつくなり、靴も脱がずに崩れ落ちるように、眠った。田村は、種子田やドルチェと相談の末、明日BCを撤収し、山をおりにことに決定した。(高梨)

3/9(木) 曇りのち雪 気温の記載なし

朝食後、BCを撤収。今日から下山を始める。10:50 記念撮影をして出発。12:20チュクン着。14:00 ディンボチェ着。ディンボチェについたとたん、雪が降り始めた。ここで会った奈良女子大学のトレッカーの話では、大沢は体調を崩して、目を潤ませていたとのことだ。今日、22才の誕生日をむかえた田村は、この高所にもかかわらず酒をしこたま飲み、女子大生にからんだ。(田村)

3/10(金) 晴れのち曇り 気温の記載なし

9:45出発。14:10タンボチェに到着。空身のうえ、下りなので行程がはかどるが、上り坂では極度に疲れる。緊張感がなくなったからだろうか。今日も最後の上りでバテバテになった。昨日から次第に天気が悪くなってきている。飛行機が飛べるかどうか心配だ。(種子田)

3/11(土) 曇りのち雪 8:00, 5°C 以下記載なし

8:50出発。11:50ナムチェに到着。ナムチェに着く少し前から雪が降り始めた。21:00現在、積雪量は10センチ程度である。ヤクの飼い主が、明日は動けないという。ドルチェも、明日と明後日のフライトはないだろうといていた。どうなることやら。ここで大沢と合流する。体調が悪くて、予定していたゴーキョに行かず、早めに戻ってきたらしい。だが、奈良女子大生の話しに聞いていたほどではなさそうだ。(小嶋)

3/12(日) 曇り時々晴れ 気温の記載なし

雪がやんだので、なんとか行けそうである。10:45出発。道がぬかかっていて歩き辛い。15:40パグディンマに到着。途中で高知大のワンゲル部に会う。ジリから歩いてきたという彼らは、日本の山と同じように、ばかでかいキスリングを背負っていた。あの中には、いったい何が入っているのだろう。

宿では、ドルチェ、タキ、ヤクの飼い主が賭けトランプをやっている。ばくち好きの小嶋は、それに参戦して彼らから金を巻き上げた。

明日はルクラだ。精神的に張りがなくなったためか、なんだかヤケに疲れる。登頂後ずっと続いているこの無気力状態を、田村は“クライマーズ・アパシー症候群”と名づけた。(高梨)

3/13(月) 晴れのち曇り時々雨 気温の記載なし

9:10出発。小嶋は昨夜の食べすぎのため、腹具合がおかしい。11:30ルクラに到着。ロイヤル・ネパール航空で、フライトの手続きをしたあと、帰りの装備分け、パッキングをおこなう。ほっとしたためか、たまっていた疲れがどっとでたようだ。旅の終わりを実感させられる。明日、飛行機が無事に飛んでくれればいいのだが。(田村)

3/14(火) 晴れ 気温の記載なし

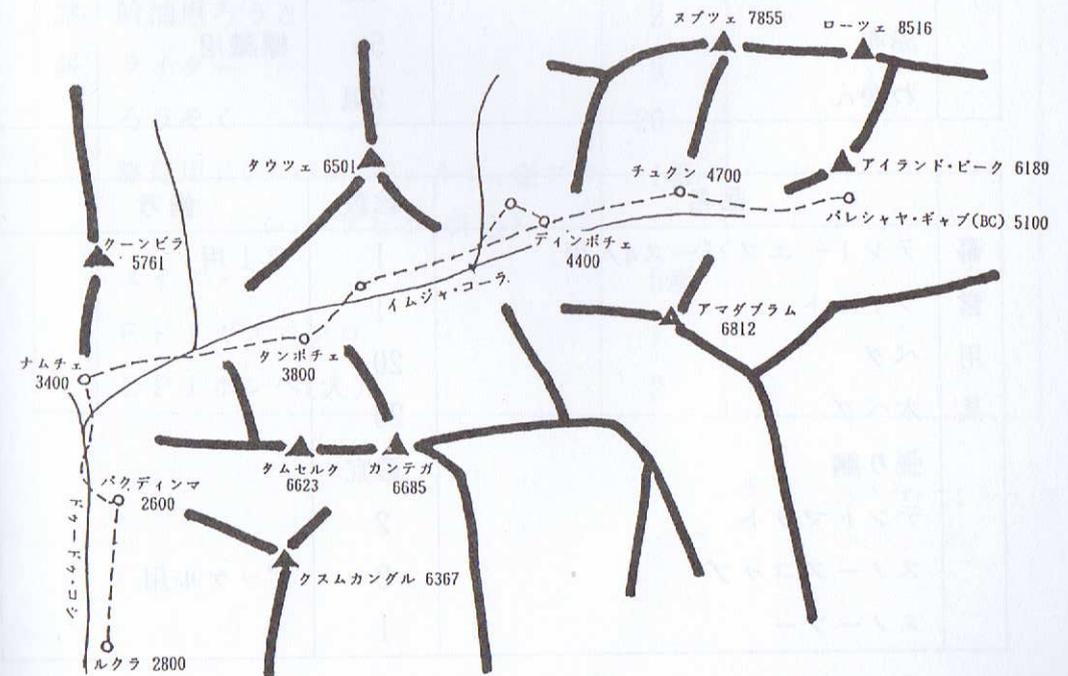
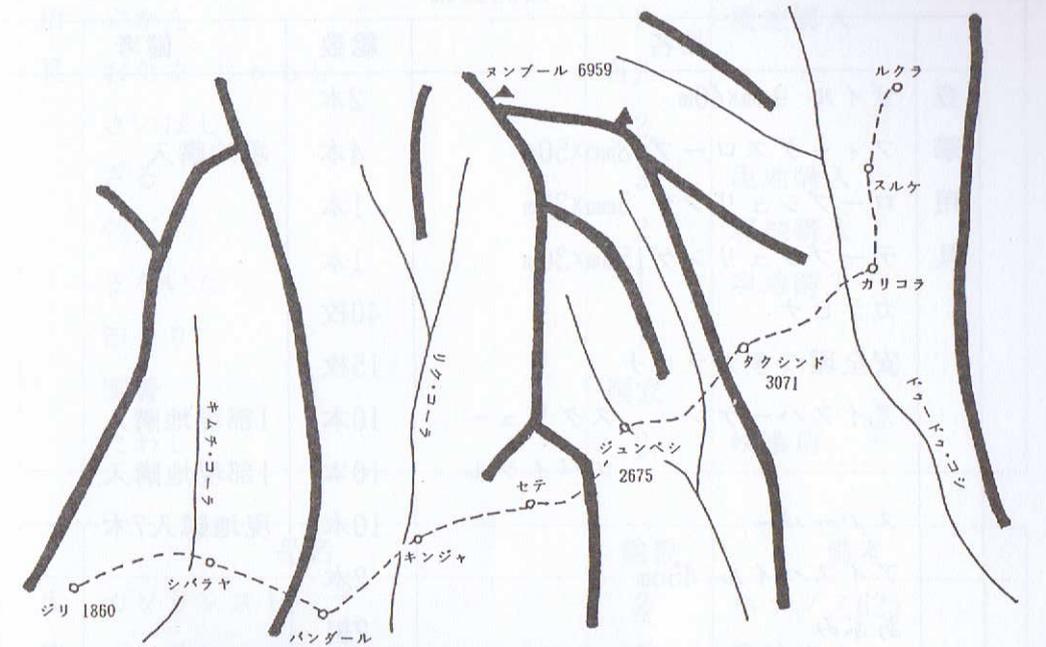
どういうわけか、朝一番のフライトに乗り損なった。はやく帰りたい一心のみんなは、ふくれっつらになる。9:30 第2便でルクラを離れ、10:15カトマンズに無事着陸。初めてこの飛行機に乗った田村は、飛行機が激しく揺れるたびに悲鳴をあげた。

コスモ・トレックで装備の返却をしたあと、ヒマラヤン・レストハウスにチェックインし、1人でカトマンズに戻っていた常世田と合流する。

夕方、打ち上げパーティを階下のレストランでおこなう。山で食べられなかったうっぶんばらしに、中華料理のフルコースをむさぼるように食べる。

この日をもって、ヒマラヤ隊は解散し、翌日からまた、各自思い思いのところへ旅立っていった。(種子田)

地図



装備

高梨洋之

共同装備

	品名	総数	備考
登 攀 用 具	ザイル 9mm×40m	2本	
	フィックスロープ 8mm×50m	4本	現地購入
	ロープシュリング 5mm×30m	1本	
	テープシュリング 15mm×30m	1本	
	カラビナ	40枚	
	安全環つきカラビナ	15枚	
	アイスハーケン スクリュー	10本	1部現地購入
	スパイラル	10本	1部現地購入
	スノーバー	10本	現地購入7本
	アイスバイル 45cm	2本	
	あぶみ	2組	
	ユマール	4組	
	赤布	5m	標識用
	わかん	2組	

	品名	総数	備考
幕 営 用 具	テント エスパー 4人用	1	C I 用
	ツェルト	1	
	ペグ	20	
	木ペグ	20	
	張り綱	適宜	
	テントマット	2	
	スノースコップ	2	ピッケル用
	スノーソー	1	

	品名	総数	備考
炊 事 用 具	圧力鍋 6人用	2	現地購入
	コッフェル(大中小セット)	1	
	やかん	2	現地購入
	おたま しゃもじ	各2	
	さいばし	2	
	ざる	3	現地購入
	包丁	2	現地購入
	まないた	1	現地購入
	缶きり	1	
	割箸	適宜	
	たわし	2	炊事用

	品名	総数	備考
火 器 燃 料	ガソリンストーブ	2	ホエブス625
	ガソリン	15L	現地購入
	給油用ろうと	2	
	ライター	5	
	ろうそく	20	
	修理用具(スパナ、パッキン、金ブラシ、ヘアピン、針金)	1組	
	スイスメタ	5箱	
	EPI ガスコンロ	1	
EPI ポンベ(大)	2		

	品名	総数	備考
そ	ガムテープ	2	布製
の	リペアテープ	適宜	
他	針金(細)	40m	
	(太)	40m	
	雑ひも	適宜	
	ラジオ	1	
	新聞紙	適宜	現地購入
	行動記録ノート	4	隊用
	高度計	1	
	たわし	4	雪払い用
	ビニール袋(大中)	適宜	

個人装備

品名	個数	品名	個数
ダウンジャケット	1	ダブルヤッケ	1
セーター	1	毛下着(上下)	1
スパッツ	1	オーバーミトン	1
毛手袋	2	日出帽	1
ロングソックス	3	プラブーツ	1
替えひも	1	スパッツ用ゴム	2
アイゼン	1	ハーネス	1
カラビナ	2	ピッケル	1
ヘルメット	1	ロープシュリング	4
テープシュリング	4	ヘッドランプ	1
替え電池	20	ゴーグル	1
アタックザック	1	サブザック	1

エイト環	1	ナイフ	1
食器	1	フォーク スプーン	各1
コンパス	1	ホイッスル	1
ポリタンク	1	ライター	1
羽毛シュラフ	1	テントマット	1
シュラフカバー	1	新聞紙	適宜
缶メタ	1	ロールペーパー	4
ビニール袋	適宜	フィールドノート	適宜
筆記用具	適宜	海外旅行保険	1
航空券	各自	パスポート	1
現金	各自	キャラバン用シューズ	1
個人用薬品	別記	テルモス	1
タオル	2	時計	1
歯磨きセット	1	着替え	各自

装備は過不足なく、うまくいったと思う。私たちはかなりの装備類を現地で調達したのだが、ここではそれについて報告する。

カトマンズのタメル・ストリートには登山用品店がたくさんあって、必要な装備を購入、または借用することができる。装備の種類に関しては、ザックから登攀具、火器、テントにいたるまで、すべて揃っている。ただし、ザイルなどは古いものが多く、なるべく使わない方が良さそうだ。

以下は私たちが現地で購入、もしくは借用した装備の主なものである。値段は大体において、それほど高くない。ただしEPIなどのガスボンベについては、日本で買うより高い傾向があるようだ。

共同 [EPIボンベ10個(買)、BC用テント2(借)、BC用炊事用具(借)]

個人 [羽毛シュラフ(借)、ダウンジャケット(借)]

これ以外に、フィックスロープ、スノーバーをナムチェで借用したが、残置したために結局弁償することになった。日本からもっていける重量に限度があるので、不足分を現地調達に頼るのは良い方法だと思う。

食糧

種子田幸太郎

BC食メニュー

朝	昼	夕	
米飯 みそ汁 ふりかけ 缶詰	A ラーメン 米飯 ふりかけ B 行動食 (ルート工作中)	A カレーライス スープ B シチュー 米飯 スープ	C 野菜炒め 米飯 スープ D チャーハン スープ

C1食メニュー

朝	昼	夕	
A ラーメン もち 乾燥野菜 乾燥卵 B 雑炊 缶詰	A カロリーM D フルーツ チョコレート ビスケット B 鶏飯 みそ汁	A 雑炊 スープ フルーツ缶 B 牛飯 スープ フルーツ缶	C 天丼 フルーツ缶 スープ

スペシャル・ボックス

A	B
コーヒー 紅茶 ココア 日本茶 ウーロン茶 スキムミルク スープ みそ汁 ポカリスエット	チョコレート 甘納豆 ようかん ナッツ類 サラミ類 ビスケット チーズ

[基本方針]

- 1 キャラバン中は、宿泊するロッジやバッチェイ（茶屋）で食べる。
- 2 BCでは、現地購入食と日本からの持ち込み食との組み合わせとする。
- 3 C1では、フリーズドライを中心とする。
- 4 BC、C1にそれぞれ、飲物と嗜好品を中心としたスペシャルボックスをおく。

国内購入食糧リスト

品名	総量	価格	備考
もち	60個	2000	
即席みそ汁	18パック	280	6人×3日
固形スープ	25個	280	マギーブイヨン
ほんだしの素	2袋	300	
味噌	1kg	200	
しょうゆ	小3本	320	
乾燥わかめ	15パック	320	
ふ	大1袋	130	
かつお節	10パック	220	
粉末コンソメ	1袋	110	
肉(FD)	42箱	13440	
ほうれん草	9箱	2880	
ねぎ	3箱	960	
卵	9箱	2880	
ドライフルーツ	30箱	12600	
雑炊	30箱	11100	370円で計算
鶏飯	18箱	6660	
天丼	6箱	2220	
牛飯	6箱	2220	1日分

食糧報告

種子田幸太郎

シチュー粉	2箱	300	
ポカリスエット	20袋	3000	S・Bに1袋
計		62420円	

現地購入食糧リスト

品名	総量	価格	備考
米	126合		1人1食1合 約18kg
ラーメン	60個		タイで購入
じゃがいも	42個		1kg=5個で計約8kg
にんじん	21本		
玉ねぎ	21個		
フルーツ缶	30個		日本とほぼ同じ値
缶づめ	54個		
塩	1kg		
こしょう	3本		
砂糖	1kg		
サラダオイル	3本		
ミルク	3箱		250g×3
紅茶	150パック		
コーヒー	7本		
ココア	5袋		
はちみつ	4本		
カレー粉	2箱		
チーズ	6箱		
ビスケット	12箱		
チョコレート	8袋		
ナッツ	2袋		
スティック砂糖	300本		
粉末ジュース	100パック		

食糧計画は、購入、内容ともに大きく二分できる。

(1) 購入

国内で調達するものと、現地で手に入れるものに分かれる。その内容は、どのような登山を考えるかに大きく影響を受ける。

まず、極地法による大規模なものを考えるならば、キャラバン中は当然安価な現地食中心となる。高所食を別にして、あとは完全に現地食ですませる。現地食中心の欲求不満を、行動食の嗜好品で解消するというものである。この場合、食糧の大半は現地購入となる。

また、高所登山研究所的なものとは異なるが、なるべく短期間で全行程を終了させる場合、日程の短い分だけ、食糧を充実させることができる。すなわち、国内購入の比率が増すわけである。

実際には、これに様々な要因がからんでくる。最大の問題が輸送である。これには費用と方法に関して、制限が加えられる。日本からネパールまで、空輸の場合1kg1000円を優に越える。送らなければならないのは、食糧だけではない。学生の我々には、そのような金銭的余裕はないのである。また、一人が飛行機に持ち込める重量も決まっている。これらを考え合わせると、日本からもっていく荷物は極力少なくしなければならない。必然的に、食糧にしわよせがくるのである。

結果的に小人数のパーティでありながら、時間的、金銭的な制約から、なるべく短期間でアタックを成功させるが、食糧は現地食中心にするという方向でできた。

(2) 内容

具体的には、国内では調味料と高所食の餅、ドリンク類にとどめ、残りを現地購入とした。その内容はカトマンズでチョコレートとビスケットの類、ナムチェ・バザールでの米20kgをはじめとする食糧である。ナムチェでの購入リストは、あらかじめシエルパのドルチェとハクシー（キ

キッチンボーイ) が作ってくれたので、私はそれを軽くチェックした程度で、あとは彼らに任せておいた。

日程的に短い(二週間)ので、現地食で通しても全員耐えられると考えたのである。実際には、ナムチェで買った食糧はBC用で、それまでは宿泊するバッチェで食事を作ってもらった。しかし、思っていたより、高度障害による食欲減退が激しかった。BC手前のチュクンで二人、BCで一人高山病の症状がひどくなり、食事もろくにとれないような状況になった。これは十分な高度順化をおこなわずにキャラバンを続けたためであろう。とにかく時間的に余裕がなかった(費用の問題、後述)ことが大きかった。

(3) 総括

今回食糧計画を担当してみて、いくつかの点に気がついた。まず、キャラバン中の食糧計画をあまり考えなかった点。途中のバッチェで食事はとれるからと楽観視していたことが反省される。結果的に、このキャラバン中の調整を失敗したために、アタックを断念せざるを得ない隊員がでた。単純に高所食以外は現地食でとれたのが、その遠因となっていると思う。

また、シェルパと食糧計画に関してディスカッションしなかった点。彼らに任せきりでこちらの調整を考えなかったことも反省される。

それから、時間の余裕をもたなかった点。これはポーターとかヤクの費用が当初の見積もりをかなり越えてしまったことによる。去年某テレビ局主催でおこなわれた三国合同登山隊が、ポーターの雇用費用などの相場をつりあげてしまったためであるが、計画段階での調査が足りなかったと言えよう。

では、どうすればいいのか。仮に再度、アイランド・ピークにアタックをかけるとすれば、次のような食糧計画を組みたい。

(キャラバン中)

BCまで九日(ナムチェ、ディンボチェ、チュクンを二泊)とし、夕食は二日に一度、カレー等の日本的なものをとる。行動中はポカリスエット

トなどのドリンク、カロリーメイト。朝は卵とトースト、もしくは焼飯。そして全食キッチンボーイに作ってもらう。

(BC)

現地食よりも、日本食の割合を増やす。特に一回の食事の量を減らし、回数を増やす。例えばホットレモンと麺類など、水分の多いものを多くとり、なるべく固形食をとる回数を減らす。

(AC)

アタック前には水分、糖分の補給を十分にすませておく。また、ビタミン剤などを用いて、体の活性化を図っておく。特にビタミンB群、C、Eに関しては、注意深く摂取するようにする。

一番注意しなければならないのは、短期登山の場合BCに入ってから食事の内容を変えても遅いということだ。食事は全行程を通して一人のキッチンボーイに任せるとしたほうが良いだろう。問題なのはBCに入ってからではなく、入るまでである。これを今回は痛感させられた。



医療

小嶋健太

使用した薬品の種類は、それほど多くなかったので、個々の薬品につき、使用状況をまとめてみた。

[抗生物質]

高梨はジリからのキャラバンで体調を崩し、下痢と嘔吐を繰り返した。トミロンを服用したが効果がなく、田村が持参したミノマイシンを服用したところ、いくらか症状が軽くなった。しかし、最終的に治ったのはカトマンズの医者にかかってからである。本格的な病気にかかったときは、すみやかに現地の病院にいった方がいいだろう。ただし、ネパールは、カトマンズ以外の医療事情が極端に悪い。

[下痢止め]

種子田と小嶋は、チュクンとBCでそれぞれ下痢にみまわれ、下痢止めを服用したが、あまり効果はなかった。この場合、原因が高山病、あるいは食べ物が合わないことによる精神的なものだと思われるので、高度を下げるしか治療の方法はないだろう。高山病に関しては、別項で述べる。

[胃薬]

食べ物が合わなかったせいだろう。かなり使用量が多かった。第一製薬のセンロックと太田胃散の2種類をもっていったのだが、隊員の間では太田胃散の評判が良かった。これは太田胃散を服用すると、一瞬胃がスツとするからだと思われる。顕著な効果はみられなかったが、気休めにはなるのであっていった方がいいと思う。

[鎮痛解熱剤、総合漢方薬]

高度を上げるにつれ、多くの隊員は体調を崩したが、この2つは風邪気味だと感じたときに、予防的な意味で使った。正直なところ、体調の悪さが風邪によるものか、高度によるものかは判別できない。

[せき止め]

これは必携である。空気が乾燥しているため、非常にせきがでる。隊員の中では、大沢のせきが特にひどかった。薬を飲むとそれなりの効果はあるようなので、体力の消耗を防ぐためにも用意した方がいいだろう。

[便秘薬、浣腸]

他の隊員が下痢で苦しんでいたとき、田村は一人便秘に悩んでいた。便秘

薬を飲んだが効きめがなく、恥を忍んでいちじく浣腸のお世話になろうとしたが、使い方がわからず難儀した。高所登山では、繊維質のある野菜などが食べられないために、便秘や痔になるケースが多く、持参した方がよい。

[携帯用酸素]

結局もっていかなかった。標高6189メートルのアイランド・ピークでは、必要はないだろう。しかし、酸素があれば、登頂後の激しい頭痛をある程度軽減できたかもしれない。

[日焼け止め、リップクリーム]

紫外線が強いにもかかわらず、日焼け止めを忘れたのは大チョンボだった。カトマンズでニベアクリームを買って代用したのだが、これでもそこそこの効果はあったようだ。

[予防接種]

A型肝炎の予防接種は、カトマンズで受けることができる。病院ですぐ打ってくれるし、値段も安い(2カ月間有効で800円程度)ので、日本でしていくよりもいいだろう。コレラは、死ぬような病気ではないが、かかれば帰国したときにニュースになり、隔離されてしまうので恥ずかしい。それに対し、狂犬病、破傷風は、死ぬ可能性が高いので、コレラなどより、本来よほど予防の必要性があるのではないか。

[まとめ]

振り返ってみると、隊員の体調の悪さは、ほとんどが体力の衰弱からきているようだ。原因は高度の影響と、食べ物が合わなかったことの相乗効果だろう。だから、発病後の対策を考えるよりも、予防に力を入れた方がいいと思う。高度に関しては、限られた日数での順応を強いられた場合、いかんともしがたいが、食べ物に関してはなんとか対策がたてられる。

食欲のあるうちは、とにかくできるだけ食べる。そして食欲不振時にそなえて、ふだん食べなれた日本食をもっていった方がいい。また、ビタミン剤などの栄養剤の使用も効果的だろう。とにかく無理をしないで、体力を維持するように心がけることが大切である。

[おわりに]

医薬品については、隊員のアルバイト先である長田病院を通じて、多大な援助を受け、質、量ともに十分なものをもっていくことができました。また、栄養局の方々にも、いろいろとお世話になりました。皆様のご好意に、隊員一同感謝しております。どうもありがとうございました。

高山病について

小嶋健太

隊員の体調を、滞在した場所の高度にしたがってまとめてみた。

日程	宿泊地	標高	行動、症状
2/27	パクディンマ	2650m	全員快調で、予定通りキャラバンを始めた。
2/28	ナムチェ	3450m	ナムチェ前の急登をゆっくり歩くが、息がきれる。特に不調を訴えるものなし。
3/1	ナムチェ	3450m	高度順化のため停滞し、4000mほどの小ピークに登る。常世田は息切れが激しく、軽い頭痛もあったので利尿剤を服用する。
3/2	タンボチェ	3850m	高度順化日を設けたためか、行動中は全員快調である。タンボチェ到着後、近くの小ピークに登った小嶋は、下腹部痛を感じた。
3/3	ディンボチェ	4400m	田村、高梨、種子田、常世田は、出発前に利尿剤を服用する。食事の質が悪くなったこともあり、皆の食欲が落ちている。特に種子田の食欲不振が著しい。常世田は頭痛などの高山病の初期症状がはっきり出始めた。
3/4	チュクン	4750m	チュクン到着後、順応のために小ピークに登った小嶋は、再び下腹部痛を感じる。種子田の食欲がさらに落ちている。
3/5	パレシャヤ・ギャブ(BC)	5100m	昨夜未明から下痢にみまわれた種子田は、チュクンに停滞する。食欲は極端に落ち、水を飲んでも吐きそうになる。常世田はなんとかBCまで来たが、頭痛がひどくチュクンに引き返した。特に前頭部が痛く、山の端の空の色が、紫がかって見えたという。田村は高頭部に軽い痛みを感じ、食欲不振である。小嶋はBC到着後、ルート偵察で300メートルほど登ったが、またもや下腹部痛を感じ、下痢気味になった。その後、夜間から

3/6	パレシャヤ・ギャブ(BC)	5100m	頭痛と激しい嘔吐感にみまわれた。高梨は体調良好で、常世田につきそってチュクンに下った。 小嶋は吐き気がひどく、チュクンに下った。田村は食欲がなく、脂っこいものは食べられない。また、顔にむくみが認められ、利尿剤を服用する。種子田は、下痢は治まったが相変わらず食欲不振である。常世田はチュクンで1泊した後、元気を回復した。BCに上がってきた高梨は食欲旺盛、快調である。
3/7	パレシャヤ・ギャブ(BC)	5100m	田村は夜中に3回排尿し、顔のむくみが取れた。食欲は相変わらず不振。種子田はBCまで来たが、やはりほとんど食べられない。小嶋は嘔吐感は消えたが、下痢がひどく食欲不振である。高梨、常世田は体調良好。
3/8	パレシャヤ・ギャブ(BC)	5100m	頂上アタックをした田村、高梨は、下山中に頭痛がひどくなり、激痛はBCに降りた後も約1時間続いた。2人とも顔のむくみがひどく、食事はみそ汁だけしかとれなかった。種子田は頭痛がひどく、BCに停滞。小嶋は下痢がかなり治まり、食欲も少し戻ってきた。BC入り後、軽い頭痛を訴える。
3/9	ディンボチェ	4400m	高梨がチュクンを過ぎたあたりから下痢になる。その他の者は、高度を下げたために元気を回復。
3/10	タンボチェ	3850m	これ以降、高度を下げるにしたがって、みんな元気になっていった。

[まとめ]

今回の登山では、ほとんどの隊員が高度にうまく順応できずに体調を崩し、高梨1人が最後まで体調を保った。

1番大きな原因は、やはりキャラバンのペースが速かったことだろう。予算不足のためやむを得なかったが、高所では意識的に歩くスピードを遅く

し、1日の行程を短くすることが望ましい。

キャラバンの前半、もっとも調子の良かった小嶋は、BC到着後、いきなり体調を悪化させたが、それまで度々感じていた下腹部痛が伏線になっていたようだ。自分の体調に常に気をつけておいて、おかしいと思ったら無理をしない方がよい。また、高度を下げると確実に症状は回復にむかう。高梨はBC到着後、常世田につきそってチュクンまで下ったのが、うまく高度に順応できた原因かもしれない。

利尿剤については、やはり服用した方がいいようだ。高所では脱水症状になりやすいために、意識的に水分を多く摂取(1人1日約5ℓ)する。しかし、高所反応によって、小便があまり出なくなるため、利尿剤を飲んで水分を体外に排出する必要があるのだ。顔などのむくみは、それによってとれる。また、タンポチェ以来、毎日利尿剤の服用を続けていた高梨は、最後まで好調を保ち、利尿剤を全く飲まなかった小嶋は、BCの高度にきて急激に体調を崩した。

利尿剤の難点は、夜間になって尿意をもよおすことである。昼間飲んでも、どういうわけか夜になってから効いてくることが多く、寒い中何度もトイレに起き、眠れなくなってしまうので悲惨である。

製品としては、日本ではラシックスが、ネパールではダイアモックスが手に入る。ヒマラヤンジャーニーの大河原氏は、ダイアモックスを薦めていた。

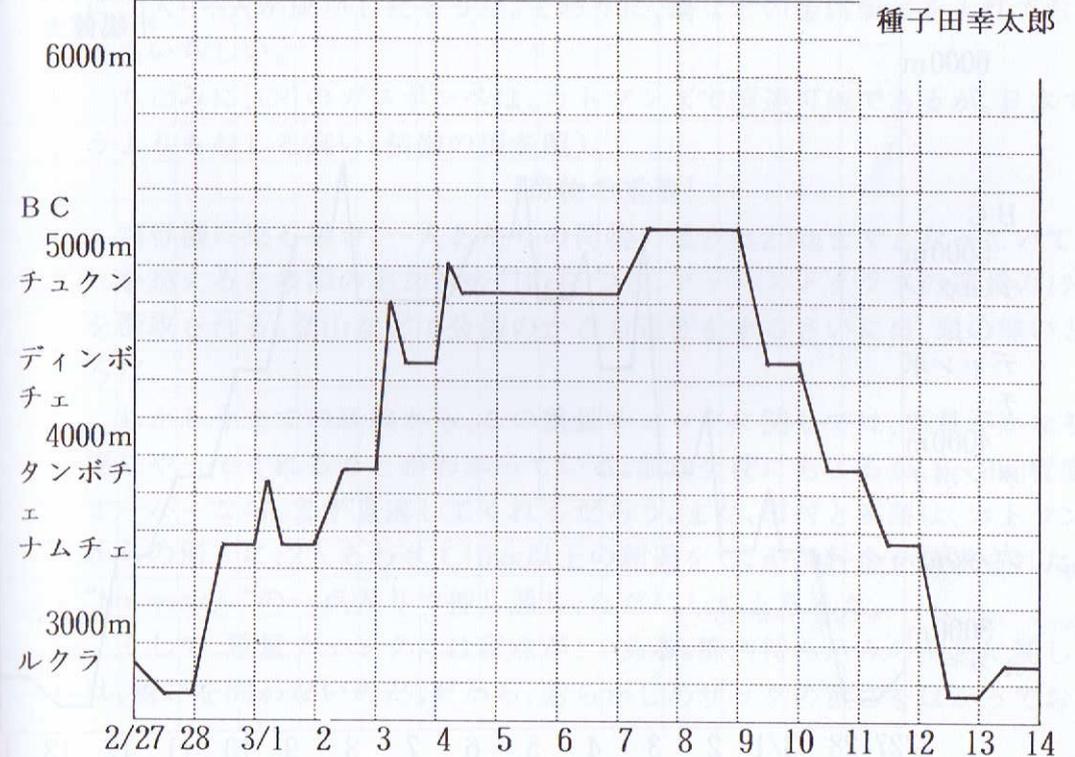
高山病でむくんだ顔



小嶋



種子田



小嶋健太

今回のヒマラヤ遠征は、私たちにとって初めての試みだった。それだけにとまどうことも多々あったが、同時に今後の参考となるような経験もした。ここでは、それらの体験のなかから、輸送に関することをいくつかまとめてみようと思う。

[空港でのX線検査]

飛行機に乗る前は、荷物の検査を受ける。成田では、この検査が非常に厳しい。機内持ち込み以外の荷物も、X線をつかって調べるのである。

田村、高梨、小嶋の3人は、EPIガスのボンベ(大)を持ち込もうとしたのだが、高梨以外は見つかって没収された。小嶋はボンベをプラスチック・ブーツのなかに隠しておいたのだが、ダメであった。高梨が見つからなかった理由は、X線検査のとき、ボンベを手荷物のなかに入れておき、検査が終わったあと、何くわぬ顔をしてザックのなかに戻しておいたからである。

もし、ボンベを機内に持ち込もうとするならば、小さいものが見つかりにくくて良いだろう。タイの空港で会った人の話だと、ボンベ(小)の持ち込みに、6人中5人が成功したそうだ。まわりに、鍋などの金属製品を入れておくとも良いらしい。

ちなみに、EPIのガスボンベは、カトマンズで調達可能であるが、日本で買うよりもむしろ高い(装備の項参照)。

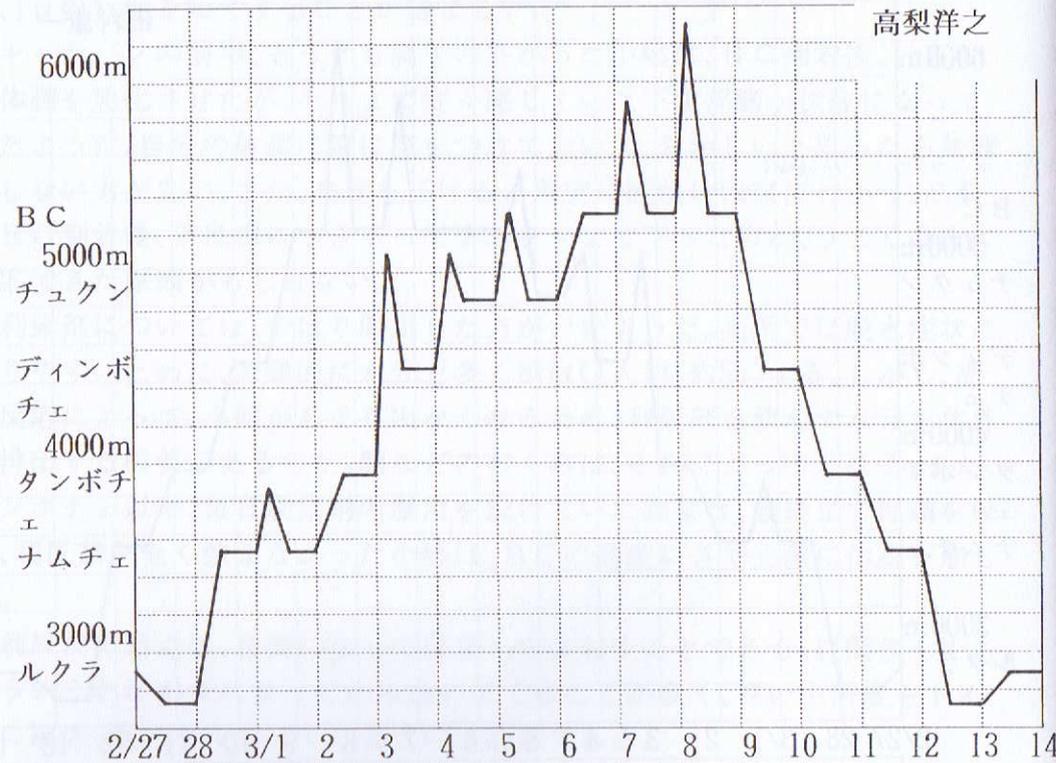
[荷物の重量]

飛行機に乗る場合、一人あたりの荷物の重さは20kgまでとなっていて、これを超えると多額の追加料金(1kgにつき、ファーストクラスの運賃の1%)を徴収される。登山などで装備のかさむ遠征をするさいには、頭の痛いところだ。

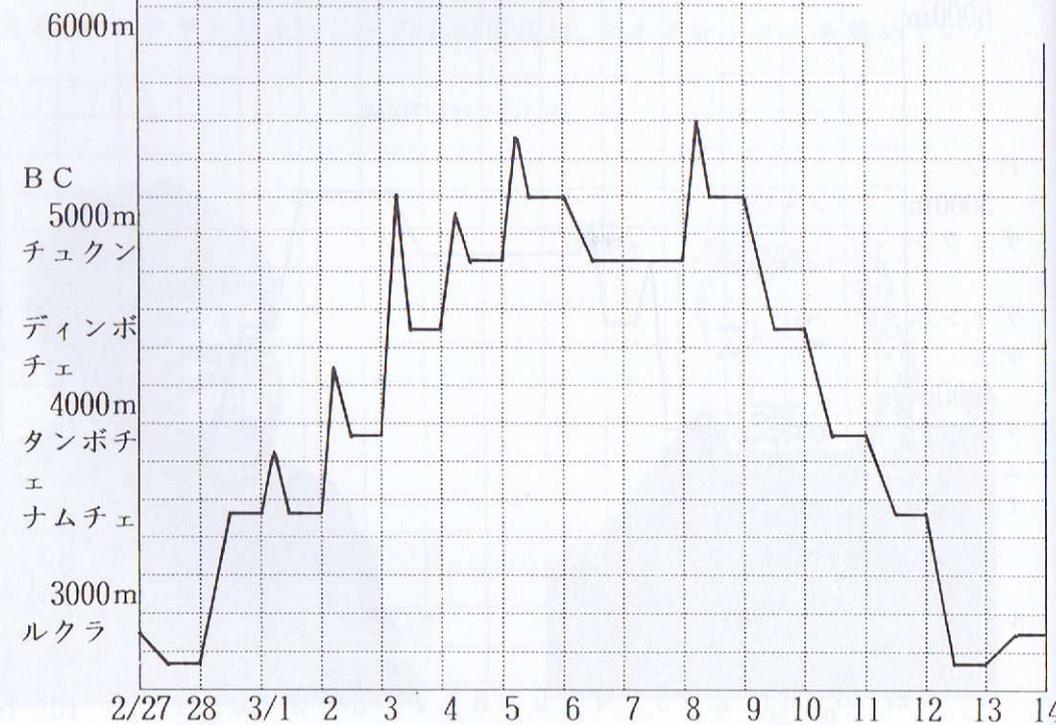
しかし今までの経験から、この重量チェックに関しては、係員がかなり鷹揚にやってくれることがわかっている。航空会社にもよるが、2~3kg程度のオーバーなら、まず見逃してくれるだろう。また、田村と高梨は、カトマンズからの帰りに、2人あわせて10kg以上の超過をし、追加料金を請求されたが、“No money.”の一点張りで押し通し、ただにしてもらった。

そして、重量チェックには盲点が1つある。機内持ち込みの荷物に関しては、重さを問わないのだ。だから、あらかじめザックの重さをはかっておい

高梨洋之



小嶋健太



田村康一

渉外は、隊のリーダーであるわたしが必然的にひきうけることになった。渉外の仕事といっても、実際なにがそれにあたるのか一口でいいあらわすことはむずかしい。そこで、わたしのかんがえる“隊長としての渉外”の定義というのは、「装備、食糧、医療、気象といった他のメンバーが分担する役割以外にかんがえられる、必要な仕事全部」というものである。ようするに雑用係ということだ。本稿では、わたしがこなしてきた雑多な仕事のなかから、いくつか主要なものをひろいあげてまとめてみた。

(1) 資金計画

“暇はあっても金がない”わたしたち学生にとっては、ヒマラヤにゆくのにいくらかかるのか、というのは大問題である。隊員ひとりひとりの事情を考慮した結果、25万円の個人負担金という一応の線がでた。しかし資金的に一番やすいけそうなネパールにおいても、6000メートル峰の登山となると、ひとりあたり30～35万円はかかる。のこりのお金をどうあつめるのかというのが、頭のいたいところであった。

結局、不足分は外部からの援助によっておぎなうことになり、探査会と探検部のOB、市大の教員を中心に資金援助計画を展開した。その結果、50万円ちかくのお金があつまり、その他食糧、医療、フィルムなどの現物支給によって隊の財政はかなりたすけられた。しかし、実際には現地での予想以上の出費により、赤字になった(会計報告参照)ので登攀隊員が中心となって赤字分をうめた。現地では予期せぬ出来事がおこりうるので、ある程度の余裕をもって予算をくむ必要性を痛感した。

(2) 後援依頼

前述の資金援助計画を円滑にすすめるためには、新聞社などの後援が有利にはたらくとかがえ、朝日新聞横浜支局に計画の後援を依頼した。一昨年、フィリピンのミンドロ島を探検したさいに、後援をしてもらったこともあり、名義の使用や紙面提供だけでなく、フィルムの援助といった後援の実質的な部分までこころよくひきうけていただき、おおいにたすかった。

また、探査会にも後援組織となってもらい、物心両面からの援助をあおぐとともに、大学側との交渉の橋わたしをおねがいするなど、他方面で便宜をはかっていただいた。

(3) 大学側との交渉

この計画を部としての正式な活動として承認してもらうために、学生課に何度かかよった。大学側の要求は、「このような計画(ヒマラヤ登山)は前例がないので、詳細な計画書や顧問の先生による承認書を提出するように」とのことで

て、超過分の荷物は機内持ち込みとすれば良い。

例外的にチェックが厳しいのが、カトマンズ—ルクラ間の飛行機だが、これについては後で述べる。

[機内持ち込みの荷物の検査]

前述のように、荷物の重さを機内持ち込みによって調整するのは良い方法だと思う。持ち込み分の荷物は、その大きさに関しても明確な制限基準はないようで、白人旅行者のなかには、50ℓ位のザックを平然と持ち込んでいる者も見受けられる。

ただ、ナイフなどを持ち込もうとすると、間違いなくひっかかるので注意した方がよい。また、バンコク—カトマンズ間の飛行機で、小嶋は重量調整のために登攀具(カラビナ、アイスハーケン類)を機内持ち込みにしようとしたところ、係員から質問を受け、説明するのに大変困った。結局、一時預かりということで、カトマンズに着いてから返してもらったのだが、危うく没収されるところだった。アイスハーケンなどの鋭利な金属類は、凶器とみなされるので、機内に持ち込まない方がよい。ただし、カラビナは尖った部分がないので、大丈夫なようである。

[カトマンズ—ルクラ間の飛行機]

この飛行機を利用すれば、1週間程度キャラバンしなければならないルクラまでの距離を、わずか40分で飛ぶことができる。しかし問題なのは、フライトの有無が天候によって、非常に影響されやすいことだ。一方の飛行場が少しでも曇っていると、すぐに欠航となる。こういう場合、朝一番の便が偵察を兼ねて飛び、後の便は欠航になることが多いらしいので、日程に余裕がないときの予約は、なるべく朝一番の便を取るようになるのが良いだろう。

また、ルクラの飛行場は舗装されていないので、雪が降ると1週間くらい飛ばなくなることがある。同時期にきていた青山学院の山岳部や、同志社の探検部の人たちは、これで足止めをくっていた。

そしてこの飛行機は、荷物の重量のチェックが非常に厳しい。手荷物まで一緒に測るのである。カトマンズ—ルクラ間は一人あたりの制限重量が外国人25kg、ネパール人15kgまでとなっている。多少の超過は追加料金を支払えばすむが、なんといっても飛行機が小さい(定員約20人)ので、荷物の量が多いときは、飛行機をチャーターするか、ジリからポーターを大勢ひきつれて、キャラバンするしかないだろう。いずれにしても、お金がなければできない芸当である。

たので、それにしがたがった。われわれの提出した予算書の額が、常識的な考えからすると、かなり少なくかんじられたので心配したらしい。また、本当にヒマラヤをのぼる実力があるのかとの不安もあったようだ。話がめんどろになってきたので、「部にこだわらずに個人としての資格で計画を実行したらどうか」との意見もあったが、わたしは、「国内の山行やフィリピンでの民族探検の場合は、計画はすんなり受理されているのに、ヒマラヤになるとうけいられないのはおかしい」と、あくまで探検部としての活動にこだわった。結局、顧問の朝比奈先生や、探査会の高松氏の力ぞえにより、この計画は“学外における団体活動”として大学側に受理された。

(4) 航空券の手配

総予算をやすくあげるためには、「いかにやすい航空券を手に入れるか」が重要なポイントである。また、先発隊、後発隊にわかれ、出発や帰国の便がそれぞれことなるので、航空券の手配はやっかいな仕事だった。

先発隊の二人(田村、高梨)は2月11日に成田をたつので、旅行代理店のH I Sにて、パキスタン航空の成田、バンコク間と、ロイヤル・ネパール航空のバンコク、カトマンズ間の往復チケットを予約した。もちろん格安航空券で、一人13万2千円であった。カトマンズからルクラまでは、飛行機をつかわずキャラバンする予定だったので、予約しなかった。また、本隊の三人(種子田、大沢、常世田)は、海外登山や、トレッキングの専門エージェントであるアトラス・トレックにて、成田からルクラまでの往復チケット(インド航空、ロイヤル・ネパール航空)を購入した。一人17万2千円と、多少割高であったが、日程的に余裕のない本隊は、日本で確実に航空券の手配をおこなう必要があったのである。急遽参加することになった小嶋は、すでに購入していたエジプト航空の成田、バンコク往復チケットに、現地でのこりの航空券をかいたし、ルクラまで総額14万円弱しかかからなかったとのことである。

たしかに、小嶋のように徹底的に安くあげるということもひとつの手であるが、登山を主目的にした遠征の場合、エジプト航空のようなバンコク到着時刻が深夜になるような便の使用は、体調管理の面からかんがえらるべきである。ただ、現地で航空券をかうという作戦は、日本の代理店に手数料をとられない分だけ安あがりである。時間に余裕のある遠征のときには、なるべくバンコク、カトマンズで航空券を入手するようにするとよいだろう。

(5) 保険の加入

万一、事故などをおこしたときのことをかんがえ、海外旅行保険にくわえて、山岳保険にも加入することにした。山岳保険というと、かけ金がべらぼうにたかいとの印象があるが、アトラス・トレックであつまっている東京海上の保険は、通常の海外旅行保険と、登山期間中の山岳保険をセットで加入できるしくみになっており、安あがりであった。かけ金の額は各自にまかせたのだが、みんなお金をおしんで、全部でかけ金が1万円をこした隊員はいなかったようである。

(6) 情報の収集

現地事情や、山の技術的な難易度、高山病などについて、実際に現地体験のある人を中心に情報収集をおこなった。アトラス・トレックの佐々木氏や、岳人編集部の山本氏からは、スライドや地図などの貴重な資料をかりうけ、おおいに参考にさせていただいた。ただ、山本氏からおかりした資料を、約束の期日までにかえさないという不手際があり、大変なご迷惑をかけた。部の信用問題にもかかわってくるので、このような失敗は二度とおかさないようにしたい。

(7) 現地における渉外

先発隊として一足先にネパール入りした高梨とわたしには、登山許可の取得、シェルパ、ポーターの雇用と保険加入、不足装備の調達といった仕事があった。これらをすべて自分たちの力でこなすのは大変である。さいわい、カトマンズには、それらの手続きを代行してくれる登山、トレッキング専門のエージェントがたくさんある。しかし、数あるエージェントのなかから、どれをえらぶかというのが、頭痛のタネであった。

検討の結果、コスモ・トレックというエージェントに手続き代行を依頼することになり、上記の仕事はすべてクリアされた。コスモ・トレックには、日本人スタッフの天津夫妻がいて、金銭面などの交渉がスムーズにいったが、反面、すんなりゆきすぎてものたりない気がした。フィピンの少数民族相手の交渉で、言葉の障害と考え方のちがいにさんざん苦労しながら、なんとか合意にもちこんだ経験が、そうおもわせるのだろう。やはり異民族相手にそのような苦労をあじわうことが、遠征におけるひとつの醍醐味ではないだろうか。

(8) まとめ

上記の他にも、渉外としての仕事はいろいろあった。今回の渉外の仕事は、単に交通機関をしらべるといった単純なものではなく、いろいろな相手との交渉や、資金計画などの隊全体のマネジメントにかかわるようなこともふくまれており、やりがいのあるものだった。反面、前文に記したように、他の係の仕事の範疇にはいらない雑用が、わたしのところに集中してきたので、面倒な点があったのも事実である。隊長権限を利用して、仕事をわりふってきたつもりであったが、結果的に一番暇であると目されていた自分が、種々の雑務を背負いこむことになってしまった。わたしの場合、隊長と渉外を兼任してしまうと、どうしても一人で仕事をしてしまう。やはり、各隊員にできるだけ平等に役割分担するのが、種々の雑務をかかえる遠征隊においては理想であろう。また、遠征経験のすくない下級生には、いろいろな仕事をまかせることが経験の蓄積となって、今後の活動にいかされていくのではないだろうか。

また、あたりまえのことであるが、対外的な折衝の場合、約束の時間を厳守するということが心がかたいものである。相手側は、いそがしい合間をぬって、われわれの“お遊び”のために時間をさいてくれているのだという、謙虚な気持ちで折衝の場にのぞむことが必要であるとおもった。

(9) 資料

現地での人件費

役職	金額
ガイド(サーダー)	45ルピー/日
コック	40ルピー/日
ポーター(低所)	100ルピー/日
ポーター(高所、雪有)	150ルピー/日

ガイドの日当は、食費、宿泊費を含まない。ポーターの料金はその当時の相場、時期や交渉次第によって変わる。

保険

役職	金額
ガイド(BCより上)	60ドル
ガイド(BCまで)	22ドル
ポーター	20ドル

ネパールルピーでの支払い可。ガイド150000ルピー、ポーター10000ルピーの支払い(死亡時)が可能ならば、保険をかけなくても良い。

航空券

区間	金額
成田⇄バンコク(PK, 60日OPEN)	80000円
成田⇄バンコク(EG, 60日OPEN)	73000円
バンコク⇄カトマンズ(RN, 60日OPEN)	52000円
カトマンズ⇄ルクラ(RN)	65ドル
成田⇄バンコク⇄カトマンズ⇄ルクラ(AI, RN, RN, 日本の代理店を通じて購入)	172000円

成田からルクラまでの一括購入は、アトラストレックで、その他のカトマンズまでの券は、HISで手配してもらった。カトマンズ⇄ルクラのみ、現地購入。

代理店住所

[H I S (HIDE INTERNATIONAL SERVICE)]

[アトラストレック]

[コスモトレック(COSMO TREK)]

装備代

役職	金額
ガイド(BCより上)	140ドル
ガイド(BCまで)	20ドル
ポーター(高所、雪有)	10ドル

支払いはネパールルピーや、現物支給でも可。コックを雇う場合も、必要に応じて装備代を払う。

※ 1ドル=25ルピー(公定レート)

手数料他

種類	金額
登山許可証	300ドル
トレッキング許可証	60ルピー/週
エージェント手数料	75ドル

登山許可証はアイランド・ピークの場合、1パーティ10人までは同額。トレッキング、エージェントは、1人当たりの支払い額である。エージェント手数料は、会社によって異なる。

※ 1ドル=140円

- PK パキスタン航空
- EG エジプト航空
- AI インド航空
- RN ロイヤル・ネパール航空

アイランド・ピーク登頂記他

高梨洋之

アイランド・ピーク登頂記

午前9時30分、いよいよ最後の難関である約100メートルの氷壁が目の前に立ちはだかった。すでにアン・フリとドルチェはルート工作をはじめており、彼らのフィックスしたロープにユマール(登降器)をセットして登ることにした。しかしこの前の段階で、我々二人は消耗し尽くしていた。とくに田村は、ベースキャンプ到着以来の食欲不振により、衰弱が激しかった。そして標高差1000メートルを、かなりのハイペースで登ったために、彼はオールアウトという感じで、「もうこれ以上、技術のいる氷壁登攀はできない」と息も絶え絶えに話しかけてきた。自分も氷壁にとりつこうとしたものの、疲労と高山病のために断念し、頂上へ行くのをあきらめてしまった。

しばらく休憩したあと、田村が急に「俺はもう登れないが、もし行けるのなら、高梨だけでも頂上へ行ってくれ」と言った。その一言が、「だめでもともと。やれるところまでやってやろう」との思いを誘いだした。一度は断念した氷壁に再度アタックすると、意外にもなんとかとりつくことができた。難しいのは最初だけで、それ以降はすんなりと登ることができた。しかし少し振り返ると、はるか下に田村の赤いヘルメットが見え、思わず足が震えた。そしてもう引き返すことができないという思いが、自分をどんどん上へ登らせた。いつの間にか、かなり先行していたドルチェとフィリップにおいついた。

フィックス・ロープ2ピッチが終わると、先頭でルート工作をしていたアン・フリ・シェルパがにっこり笑って、「あと少し」と呼びかけてくれた。しかし高山病の頭痛は次第に強まり、本当に精神力だけで登っている感じで、その精神力も頭痛に負けそうになり、「もうここで引き返そう」

と何度も思った。しかし稜線と青々とした空が近づくとつれて、「ここまできたのだからもう少し頑張ろう」と歯を食いしばり、はいつくばるようにして登った。氷がオーバーハングしているところでは、フィリップとドルチェに助けられて越えることができ、彼らに感謝した。

苦闘の末、やっと氷壁が終わり、稜線にでると先頭でルート工作をしていたアン・フリが握手を求めてきた。頭がふらふらになりながらも、彼の手をぎゅっと握りしめた。10分ほど稜線を歩くと、先頭のアン・フリが、「先に行け」と手を前にふった。そして手を前にふった。そしていよいよアイランド・ピークの山頂に立った。時計を見ると午前11時27分であった。

登頂と同時に、頭痛のためか、それとも緊張の糸が切れたためか、仰向けに倒れてしまった。しかし、登頂のうれしさと解放感は、頭痛をふきとばしてくれるものだった。ローツェ(8516M)とヌブツェが巨大な山容で我々を威圧しているものの、近くにこれ以上の高みはなく、本当に山頂に立ったのだと初めて実感した。ここからは様々な山々がその頂をのぞかせている。ドルチェとアン・フリがいろいろと山の名前を教えてくれるが、高山病の頭ではまるで理解することができない。頭上ではひととき大きなカラスが風をつかまえて空中に停止し、突然の訪問者たちを眺めていた。

カトマンズで買ったネパール国旗を広げて記念撮影をしたが、強風のため思うように広がらず苦勞した。12時少し前、下山を開始。30分も山頂にいたのだが、わずか5、6分のできごとのようであった。

カトマンズにて

カトマンズはネパールの首都であるにもかかわらず、高層ビルなどはない。大通りを少しそれれば、そこはでこぼこのじゃり道である。しかし私は、こののどかな町が好きであった。道の両側には露店が品物を広げており、通るたびに呼びかけてくる。バザールはいつも活気に満ち、店の前にはセーター、じゅうたん、野菜などが所せましと並べられている。それ

らを見ているだけでも飽きることはない。移動も自転車で充分であり、それだけ町も狭くごみごみしている。こののどかな、なにか時間のすすみかたが妙に遅いのがカトマンズの印象である。



インド人の物売りから
笛をだましとる高梨(右)

地獄

私は今回の遠征で何度かつらい目にあったが、ジリからのキャラバンの途中で襲われた腹痛ほどつらいものはなかった。原因は不明であるが、猛烈な下痢と吐き気は、本当にこの世の地獄であった。詳細を記すことはさけるが、それがピークに達したシバラヤでは、夜中に六回も吐き気のために起き、吐くときの「グエーッ」という悲壮な音がむなしく暗闇のなかに響きわたり、村人の恐怖と脅威となって、日本人の品位を大きく落としました。

ドイツ人と日本人

ドイツ人は山が好きらしく、キャラバン中によく出会った。日本人の山好きは有名であるが、ドイツ人にもそれは言えるようだ。ガイドやポータ

ーに対する態度も、英米人とは少々ことなっている。英米人はガイドやポーターを奴隷のように扱うが、ドイツ人は彼らに対してそれなりに気を遣う。これは日本人の態度によく似ている。ドイツ人と日本人の類似した国民性はよく言われることであるが、ヒマラヤというところでそれを改めて感じさせられたのも少し不思議な気がした。

オーストラリア人“フィリップ”

オーストラリア人フィリップは、我々とともにアイランド・ピークをアタックするようになったのだが、彼の行動はよく言えば大胆不敵であり、違う言い方をすればおおざっぱであった。彼には疲れという言葉がないのかと疑いたくなるくらいタフで、わたしたちが高山病による頭痛と息苦しきでへとへとになっていたときでも、ものすごい勢いで登っていた。そんな彼であったが、下山中に滑落しそうになってからはすっかり慎重になり、なんでもない斜面でも後ろ向きに恐る恐る下るようになった。また高山病も、ベースキャンプに戻ってきてから症状がでるという全く変わった男であった。

ドルチェ・シェルパのこと

ドルチェ・シェルパは、我々と共に行動を共にしたマウンテンガイドであり、とても優秀な山男だった。一見つっぱりヤンキー兄ちゃん風であるが、ささいなことにもよく気がつく、なかなかまめな男であった。ただ彼には二つの欠点があった。

その一つは、無類の酒好きである。彼は夕食のあと、いつも晩酌としてチャン(どぶろく)やロキシー(焼酎)飲んだ。キャラバン中は一度も晩酌を忘れることはなかった。そして、日中行動していても、ときおりバッティ(茶屋)で酒を飲んで、赤い顔をして歩いていた。

もう一つの欠点は、女ぐせが悪いことだった。彼はなかなかの男前であ

り、そろそろ結婚してもよい年頃なのだが、ポーターの女の子をからかったり、村の若い女に手をだしたり、トッレキング中の日本人女子大生を口説いたりしていた。

そんな彼だったが、山が近づくとつれて真剣な顔になり、いよいよアタックというときには本当に素晴らしいガイドぶりを発揮した。我々のアタックが成功したのも、彼のおかげといっても過言ではない。彼とコックのハクシーには本当に感謝している。

シェルパ

田村康一

「タムラサン」シェルパ頭のドルチェが深刻そうな顔をして、電卓を片手に近づいてくる。そして「ピッ、ピッ、ピッ」とおもむろに計算をはじめ、電卓に表示された金額が必要であることをわたしに伝えてくるのが、毎日の日課であった。まれにみる貧乏遠征隊にやとわれたドルチェは、わたしたちがロッジやポーターへの支払いにも窮している状況をしているのか、いつもすまなさそうな顔をして電卓をはじくのであった。

ヒマラヤ登山をしない人たちの間でも、“シェルパ”として知られているかれらヒマラヤの山岳ガイドは、エベレスト(ネパール名サガルマタ)のある、ソル・クーンブ地方出身の、チベット系民族である。“シェルパ”とは、ヒマラヤの山岳ガイドもしくは高所ポーターのことをさすと一般にはおもわれているようだが、それはれっきとした民族名である。われわれも不勉強だったために、ある山岳ガイドにたいして、「何年シェルパ(ガイド)をやっているのか」というまぬけな質問をして、「その質問は、おまえたちに『何年日本人をやっているのか』と聞くのと同じだ。わたしは生まれたときからずっとシェルパだ」と切り返されたこと

がある。つまり、山岳ガイドや高所ポーターがシェルパなのではなく、シェルパのなかから、ガイドやポーターになる者がでてくるのである。

シェルパは今から400年ほど前に、チベット高原からヒマラヤ山脈をこえて、ソル・クーンブ地方にやってきた。かれらは本来、オオムギ、ソバなどの栽培をはじめとする農耕、ヤクや牛、それに両者の一代雑種であるゾーをつかっていたの牧畜、それら家畜を輸送手段としたチベットとの交易、という三つを生業とし、生活していた。そのかれらが、ヒマラヤ登山の高所ポーターとして活躍しだしたのは、今世紀はじめのことである。

当時、エベレストの初登頂を目指していたイギリス隊が、シェルパの高所における順応力と、交易でつちかっていたマネージメントの才などに目をつけ、高所ポーターとして、はじめてかれらを採用した。ヒマラヤ登山における極地法に、高所ポーターの存在が不可欠であったこともあって、それ以降、各国の登山隊は次々に“シェルパ”をやとうようになったのである。以来、ソル・クーンブ地方の、寒冷な気候とやせた土壌においての、農民、牧畜民としての生活に見切りをつけたシェルパの若者たちは、多額の現金収入をもとめて、高所ポーターや山岳ガイドに転業していった。わたしたちがやとったドルチェも、そんな若者のなかの一人である。

ドルチェは優秀な男である。最初、カトマンズで会ったときは日本語はまったく話せなかったのだが、キャラバン中に暇をみつけては日本語の辞書を読んで、さっそく、「ダイジョーブネ」「ゴハン、タベマス」「ナンダ、コリャ」などの言葉をおぼえ、使いこなしていた。また、前述のようにポーターとの賃金交渉や、ロッジの支払いなどの窓口となり、貧乏な我が隊のために、経費節減に努力した。現在ではシェルパ間の競争も激しくなり、かれのような山岳ガイドになるためには、体力や登山技術にくわえて、語学力、マネージメント能力などが、より必要とされるようになってきた。それがない者は、今まで通り畑を耕し、家畜を追

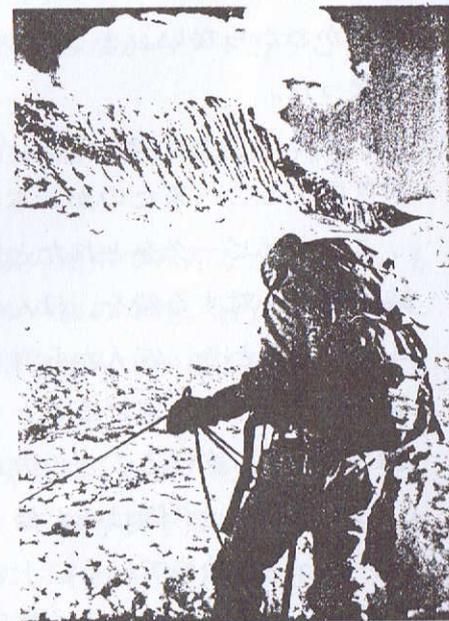
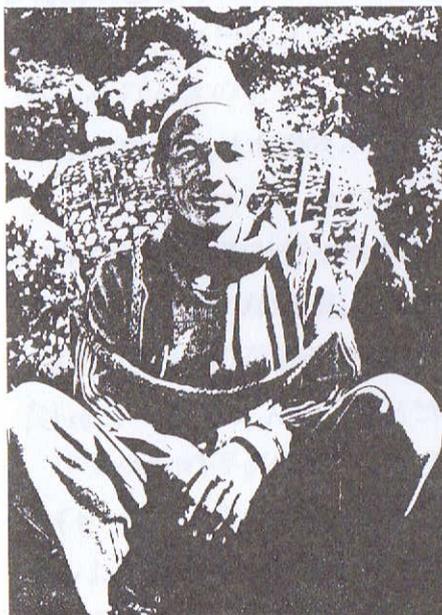
う生活のかたわらで、ポーターとして臨時収入を得ているというのが現状のようだ。

「日本人のお客は、あまり無理や、けちなことををいわないのでやりやすい。しかし欧米人は、悪天などで危険なときも、『金を払ったのだから』と無理やり働かせる場合が多い」と、ドルチェはいう。

一概にそうとはいきれない部分もあるが、彼の指摘は、われわれ日本人に対する外交辞令だけでもないようだ。現に高梨が登頂した翌日、ガイドなしで登りにきていたアメリカ人の隊が「もう滞在できる日数がない。今日中にアタックをしたいが天候が悪く、われわれだけで登る自信がない」といって、ドルチェらに大金を提示し、ガイドしてくれるように頼みこんできた。しかしもちろん、ドルチェはその申し出をことわった。

わたしはそのとき、ドルチェのプロのガイドとしてのプライドを垣間みたような気がして、うれしかった。

この愛すべき男が、いつまでも元気でガイドの仕事をつづけられるように、わたしは願っている。



種子田幸太郎

89 3/8

[気象] (朝) 快晴 (昼) 雲量やや増える (夕) 雪

2:30 起床。猛烈に頭が痛い。3:00に出発の予定だ。痛みはひかない。昨夜は嘘のように頭痛も消え、今日のアタックは絶対大丈夫だと思っていたのだが。さて、どうするか。

3:10 アタック隊出発。そのままとうとする。寒い。(中略)

それにしても痛みがひかない。向田邦子の表現を借りると、左後頭部で地虫が「じじっ」と鳴いているようだ。どうやら風邪も悪化したらしい。今にも後頭部がハク離して落ちてしまいそうだ。明日、明後日までねばっても、もう状況は変わらないだろう。気力でカバーできるレベルはとっくに越えてしまった。

くやしいがもう撤退するしかなさそうだ。午前中、テントの中で本を読みながら、無意識のうちに考えこんでいて、頭の中で何かが弾けたようだった。そのとき、もう山を降りても良いのではないかと思った。なぜだかわからない。まるでつきものが落ちたかのようにそういう気持ちになった。

なぜヒマラヤに来たのか。アイランド・ピークだけが、ただそれだけが目標でここへ来たのか。本当にそれだけなのか。(中略)

よしんばピークをとれたとして、一体俺の中で何が変わるのだろうか。結局他人に対する鎧を、ほんの少し強くするに過ぎないのではないか。日本をでるとき、友人から言われた言葉を思い出す。「日本人は困難にぶつかったとき、逃げることを悪いことだと思い込んでいる。しかし、逆にいえば、逃げることの方が何倍も勇気がいるんだ」(中略)

15:00 アタック隊はまだ帰ってこない。空模様が怪しくなってきた。雪がちらつき始めている。上の方は全く視界がきかないのではないか。

15:40 アタック隊帰る。結局ピークをとれたのは高梨一人、田村は61

00メートル地点で断念したらしい。山頂に立ったのは11:27。二人とも極度に消耗しきっている。明朝、BC撤収を決定。

ほぼ半年間かけて取り組んできた、ヒマラヤが終わった。

ヒマラヤ雑感

小嶋健太

キャラバンは快適だった。空気はうまいしチャー(ミルクティーのこと)もうまい。タバコはもちろん最高にうまい。タバコを吸わないみんなは言った。「こんな空気のきれいな所でなんでわざわざタバコなんか吸うんだ」。しかし、空気のうまいところでは、タバコもまたうまいのだ。私は休憩のたびに、555のけむりを胸いっぱい吸い込んだ。

湿度が低いので乾きがちなのを、まず甘いチャーで湿らせる。そしてタバコを吸う。シンと澄んだ水色の空に、白いけむりの帯がゆるゆるとのぼっていく。うまい。

今でも、さしておいしいタバコを浪費しながらフト思うことがある。あのときのタバコはうまかった。

なんだかタバコ賛歌みたいになってきた。話を先に進めよう。

あれはどの辺りだったろう。急な上り坂の途中でみんなが休んでいるときのことだ。私はシェルパーニ(シェルパ族の女性。彼女はポーターとして別の隊の荷物運びをしていた)と肩を組んで仲良く写真におさまった。

するとその写真はたちどころに、“国境を越えた愛”というタイトルをつけられ、田村さんをはじめみんなは、その写真を盾にとって私を脅迫した。当時私が夢中になっていた女性に、それを送り付けるというのである。

なんてひどいことを。そのとき私はそう思った。しかし、後になって現像された写真を見ると、彼らの気持ちもわかる。喜色満面、なんとまああしまりのない顔をしていることか。まったく我ながら情けなくなってしまう。

また、私がホクホク嬉しそうに女の人に絵ハガキなど書いていたものだから、彼らも内心カチンときていたのだろう。もっとも結果的には、そんな写真を見せられるまでもなかったんだけど……。

なんだか情けなくなってきた。話を先に進めよう。

谷間の町、ナムチェ・バザールでは、とても怖い目にあった。晩めしを食べ終わってくつろいでいる時だから、たぶん8時か9時ぐらいだったと思う。向かいの斜面の辺りで、「ジャーン！」というドラの音がした。よく中国の映画で、悪者の登場するシーンに鳴るあれだ。つづいて、松明らしい明かりがポッと灯る。なんだろう。みんな窓際に集まって外を眺めた。松明の明かりはゆっくりと動き始めている。

ガンガンという足音とともに、屋外の便所に行っていた種子田さんが部屋の中に転がり込んできた。ほっぺたの上がヒクヒクとひきつり、「怖え〜」という語尾が震えている。この様子では、きっとお尻をよく拭いていないにちがいあるまい。そんなことを考えていた私も、お経を読む声が微かに聞こえ始めると、背中に冷たいものが広がってきた。

ドラの音は一定の間隔をおいてなり続ける。闇から滲みでてくるような読経の声は次第に大きくなる。そして松明の明かりはこちらを目指して、ゆっくりと、しかし確実に進んでくる。

死ぬかもしれない。そう思った。あの世というものが、自分のすぐ近くにあるように感じられた。あとはよく覚えていない。バタバタ走り回っていたような気もするし、窓にかじりついていたような気もする。なにせ頭の中が真っ白なのだ。

“それ”は、ロッジのすぐ横を通ると、谷の下のほうへ遠ざかって行った。生まれて初めて、生の恐怖に触れた気がした。ザラリとした感触だっ

た。

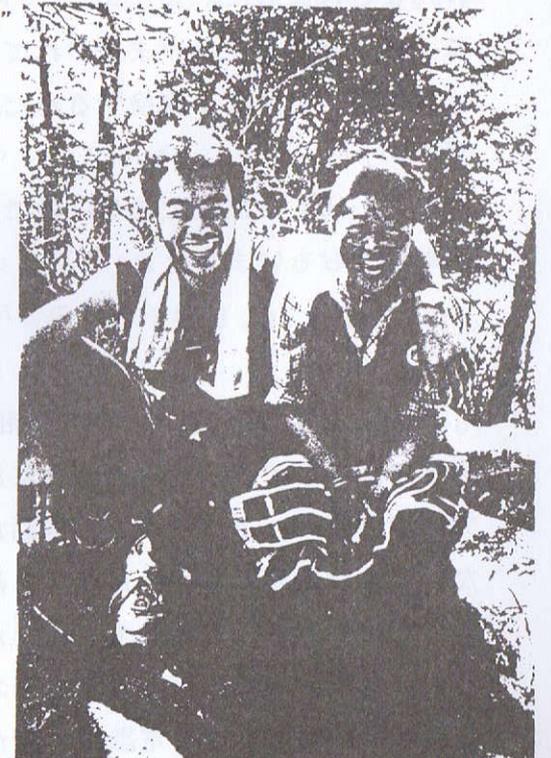
なんだか、また怖くなってきた。話を先に進めよう。

キャラバンの途中、抜群に体調の良かった私は、ベース・キャンプに入ったとたん、高山病にやられた。結局、山頂には立てなかったし、アタックもできなかった。くやしかった。しかし、それは言ってもしょうがない。高梨さん1人でも登頂できて、本当に良かったと思う。

解散後、私はインドへ行った。そして荷物を丸ごと盗まれた。次にタイに行った。そして有り金をほとんど全部盗まれた。

4月15日、私はインド服にサンダル、ずた袋にディバック1つという姿で成田に降り立った。ラッシュ・アワーの時間だというのに、私はゆうゆうと歩くことができた。みんな私をよけて通ったからだ。

“国境をこえた愛”



4700Mの抜塞大

常世田泰正

「研修生の常世田と申します。大学時代には空手道部に入っていました。利尿剤を飲んでいたために色黒になってしまいました」

「ふーん、なんで利尿剤なんか服んでたの？」

「はい、卒業前にヒマラヤへいきまして、そこで高山病になってしまったためです…」

「えっ、ヒマラヤ？ヒマラヤ登ったの？」

「いえ、登ったというか、5000Mまでです…。そこでダウンしておりました」

「へえー、かわってるねえ！なんでまたヒマラヤなんかまでいったんだい？」

「それが…、うちの大学に探検部という部がありまして、その部の奴にだまされまして。富士山どころか丹沢にもいったことがないというのに、いきなりヒマラヤまでつれていかれてしましまして…」

「探検部!?ヒマラヤ探検するんだ。それで高山病になって利尿剤を服んだのか」

「いえ、ぼくは部員ではないので探検隊ではないんですが…。でも、死ぬかとおもいましたよ」

1989年12月2日金曜日。自分は間近にせまった昇段審査にそなえて、道場で黙々と“抜塞大”の稽古に励む空手道部員だった。稽古を終えて、弘明寺のアパートへ帰ると、電話がなった。病院で宿直中の田村からだった。どうせ退屈してただけで、用事などなにもないのだろう。もしもなにか用件があったとしても、また、「白石ゼミのコンパに乱入しよう」といった類いのものだろう。そう考えていたらやはりそのとおりで、田村はなんの用事もなく電話してきたのだった。ところが…。

なにか特別に用件があってかけてきた電話でもないので、話題がない。いや、だからこそおもしろい情報をつかもうとして、電話のやりとりをしているのかもしれない。その日は、自分のほうが情報提供者になってしまった。

「ところで、パスポートってどうやってとるんだ？おしえてくれよ」

「!!。どこかいくのか？どこへいくんだ？」

しまった!!一番いってはいけない奴に話してしまった。実は前日にクラスの中からマレーシア旅行に誘われていたのだが、よりによって自分から田村に話してしまうとは!!。田村は、“こいつはおもしろいことを聞いた”てな感じで、「おい、どこいくんだよ？え、どこへいくの？」

必死の抵抗もむなしく、ついにすべてを話してしまった。すると奴は一言、「高い。いくな!!」

「いや、“いくな”っていわれてもな…」 なんだかいやな予感がしはじめてきた。

「マレーシアなら、俺がもっと安いチケットをとってやるからそれでいけ。そうしろよ」

「でも俺、海外いくのはじめてだしな…」

「じゃあ、俺たちといっしょにヒマラヤいこうぜ」

きた、きた!きた!!冗談じゃねえぞ、とおもって、

「いやぁー、でも、もう約束しちまったから」

きまったな、とおもった。ところがこの日の田村はよほど暇だったらしく、さらにねばった!!

「おまえ、金のほうはあるのか？マレーシアに行くおまえの一週間分の金で、タイならば1ヶ月は遊べるぞ。タイなら種子田たちもいったん寄るからいっしょにいけるし」

「金は一応あるよ。でも、種子田たちもすぐにネパールへいっちまうんだらう？」

この日の田村は異様にしつこかった。

「じゃあ、いっしょにネパールまでこい。なに、すこし金は多くかかる

が、そのほうがいいよ。俺らも飛行機に荷物をもちこむときに協力してもらいたいから。な、そうしろよ」

いつもながらみごとな説得の仕方。こいつの詐欺まがいの話術にノセられて、なんどでたくもないコンパへ出たことか…。そうはいくかと、

「おいおい、俺は山なんか一度もいったことねえんだぞ。そんなヒマラヤなんてとても…」

「大丈夫。途中まではトレッカーの外人がたくさん登ってるから。おまえは途中で帰すから。ハイキングのようなものだよ」

「でもなあ…。そうはいってもなあ…」

ちょっと弱気な態度を示したところを、たたみかけるように攻めこまれた。

「金はあるんだろう？なら両方いけよ。マレーシア行ってからヒマラヤいこうぜ。とりあえず予約だけとっておけよ。なっ。俺、来週に旅行社いってくるから、今週中に返事くれよ。いい返事まってるぞ。じゃあ、まあそういうことで」

いったい、なんだったのだろう。この日が金曜だから、返事までの猶予は二日間しかない。それはまるで、「八景のあさひ屋でやるコンパも、ヒマラヤへいくのも似たようなもんだ」と話す田村の術中にはまったかのようにであった。「しょうがねえなあ。一時間だけだぞ。あんまり飲まねえぞ」てなかんじで。

自分のヒマラヤゆきは、この受話器をおいた瞬間に8割方きまっていた。他の探検部員たちは、自分のヒマラヤいきを知って皆おどろいていたみたいだった。そりゃそうだ。当の自分自身が、なにがなんだかわからないのだから。

「意を決してのヒマラヤ行。その道中はやっぱり…」

3月1日、ナムチェ(3440M)にてはやくも高山病。ダイアモックス(利尿剤)を服用しているのをアメリカ人女性に目撃されてばかにされる。

「富士山にのぼったこともない奴がヒマラヤへくるなんてあいつはばかか？」うるせえ!!。結果的に自分は、利尿剤の人体実験臨床例となってしまう。

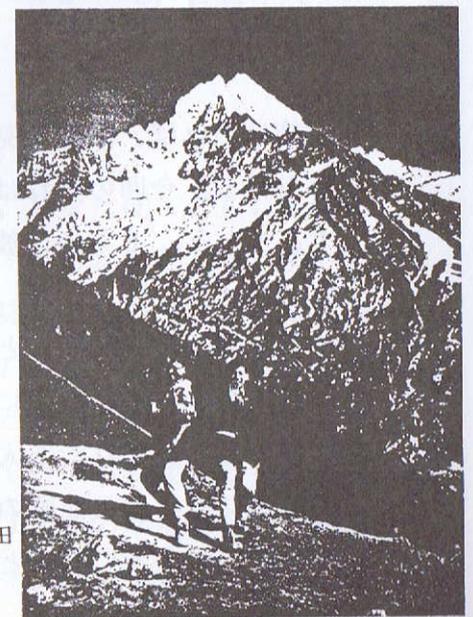
3月4日、チュクン(4700M)にて、田村にノセられて“抜塞大”を演武。空気は薄い、頭は痛い、はで死にかける。後にカトマンズで、見知らぬトレッカーの外人さんから話しかけられる。「おまえはチュクンで空手やってた奴だろう」「I am an international Karate man.」

3月8日～10日、山歴わずか九日間で、ヒマラヤの山中にひとりぼっち。探検部とはなれてひとり下山。はじめて背負う、13キロのザックはきつかった!!。田村がいうには「三日で楽に下れる行程」だそうだが、どうして、どうして…。あとで聞いた話では、奴らは四日で下ったとか。おいおい、俺本当にキツかったんだぜえ。

山からおりてみれば、自分が一番色黒。どうしたことかと思議におもっていたが、帰国後に疑問解消。利尿剤の副作用で、日光にあたると皮膚が黒ずむせいであった。人体実験台にさせられた自分が現在、製薬会社ではたらいしているというのも、なにか因縁めいておもしろい。



大相撲ヒマラヤ場所
左から小嶋、田村、常世田



種子田(右)、常世田

「それでヒマラヤはどうだった？」

「はい、楽しくはありませんでしたが、おもしろかったです。高山病でくるしみましたから」

「でも、いいよなあ。ヒマラヤか。なかなかいけねえもんなあ」

「そうですね。仲間がいなけりゃヒマラヤなんてひとりじゃいけませんしね」

「ヒマラヤかあ。俺もいつてみたいなあ。やっぱりよかった？ヒマラヤは」

「ええ、高山病さえなければ」

そのとき、自分は少し誇らしかった。横浜市立大学探検部 万歳!!

ヒマラヤ随想

大沢啓志

20才ともなれば、それなりに多くの人達と知り合うようになり、そんななかで「あっ、この人は背スジをのばしているな」と思える人に何人か出会えた。そして、そのたびに勇気づけられて、今の自分があるのだと思う。

旅に出れば、旅先で見聞きしたことを通して、いろいろと物を考えさせられる。今回のそれは、ヒマラヤの自然と、そこに住む人々の暮らしであったし、あるいは彼らと日本、そして僕自身とのかかわりについてだった。

標高4000m, 5000mという高さは、自然界のみを見てもかなり厳しい世界であり、そんな中にも生活している人々の姿は、まさに驚嘆すべきものであり、これこそ人間の力なのだろう。ただ、そんな世界だけに、都市化に毒された他国の人々が金に物をいわせて、白き峰みねを一目見ようとおしよせてくるとき、どこかにひずみが生じてしまう。それは単

一な生物層ゆえのマキ採集による裸山化であり、谷に散らばるカン、ビン、ビニール等の廃物でもあり、また畑をすてて金まわりのいいガイドや宿泊業への転業である。悲しいことに、人は大いなる力を前にして、いくらでも卑屈になれる。なぜなら、流されてさえいけば、いくばくかの金と地位が手にはいるのだからだ。

ヒマラヤの人々にしてみれば、僕のような貧乏人トレッカーですら、自分達ではどうすることもできない大いなる力の側なのだ（経済のみを見ても、日本の円はそれほど強いのだ）。それを考えると、はたして本当に僕は彼らと接し得たのだろうかと不安になる。たしかに表面的には、共に笑い、一緒に酒をのみ、互いの国について言い合いもした。が、それは実は、越えることのできない谷をはさんでの手旗信号にすぎなかったのではないか、あるいは、それすらも一方的に僕が思い込んでいるに過ぎないのでは、と。

それでもいい。追いつきたい。僕にできることはそんなことぐらいなのだから。

今後ますますネパールは観光地化されていくだろう。トレッカーに踏み固められた大地は、もはや再生しないかもしれない。だからこそ、今の姿を伝えたい。まだ見ぬ子供達へ。この地にはかつて、自然と人々のたしかな営みがあったのだと。

以下、2,3現地での体験や感じたことを記す。

あるバッチィ（茶屋）でお茶を飲みながら、日なたぼっこをして休んでいるときのことだ。赤ん坊を抱いたバッチィのおかみさんが、僕のとなりに座って、おもむろに胸をはだいて赤ん坊に自分の母乳を与え始めた。その母親の我が子を見る目に僕は「ハッ」とした。そのまなざしが、たしかな優しさを感じ得ぬにはいられないほど真剣だったからだ。

思えばここは4000m以上の地、森林限界近くのほふく性のビャクシン、シャクナゲの他、千本科植物とコケ、地衣類ばかりの草地帯と、きわめて貧しい生物層なのである。リンドウ、サクラソウ、ウスユキソウなど

の高山植物は一応花を開き、春を告げてはいるものの、夕方、日が山あいにかくれば、たちまち氷点下という世界である。かろうじて人々は、寒さに耐えながらも石を積み家をつくり、やせこけた土地を耕し続けてきた。しかし、ここは人の住む限界の地、大人に慣れない子供が多いらしい。つねにそんな厳しい自然とむきあった暮らしが、彼らのあのおおらかな気質をかたちづくっているのだろう。ふくよかで豊かな胸を赤ん坊にふくませながら、あれだけ優しい目で我が子を包みこめる姿に、「強いなァ」と一口もらしたのをおぼえている。

ある宿で、白人のトレッカーと一緒にになった。彼はザックからおもちゃをとりだして、子供達にわたして、遊び方を教えていた。ねじれたゴムが戻るのを使ってプロペラが回り、円盤が飛ぶという簡単なしかけのものだったのだが、子供達は、ひもを引っ張ると円盤が飛ぶのがよっぽどおもしろかったらしく、我もとばかりに取り合っただけで遊んでいた。

そのときは、ぼんやりとその光景を眺めていたのだが、次の日、そのおもちゃがこわれて部屋の隅に転がっているのをみつけた。ゴムがはずれてプロペラが回らなくなったらしいのだが、そんなことを子供が知るはずもなく、動かなくなった物体は、子供にとってもはや興味の対象ではなく、破壊行為の対象でしかなかった。バラバラにされたそのおもちゃを見て、なんともしれない寒いものを感じた。もし、はずれたゴムをまた引っかければ直ることを知っていたなら……。そして、話はそれだけではすまなかった。

タンボチェという村に、有名なゴンバ（お寺）があった。このタンボチェゴンバは、この周辺に散在する村むらのラマ教寺院の総本山にあたるものだったのだが、ひと月ほど前に、火事で焼けてしまった。なんと出火の原因は、新しくつけた水力発電所のショートによるものらしかった。こんなヒマラヤの山奥に、発電所の仕組みを学んだものなどいるはずもなく、おそらく他国の技術援助と称した置き土産だったのだろう。ぶつけようのないやるせなさの念とともに、僕はゴンバの焼け跡の前に

立った。いや、立ち尽くすことしかできなかった。

その後、こわれた発電機は処理などされるわけもなく、この村では以前のようにロウソクとケロシンランプでともしびを得ている。



焼け落ちた寺院

ナムチェで近くの丘へ散歩していたときのことである。手前の方から歌声が聞こえてきた。子供の声だ。仕事歌というのはどこの国でもある。単調な野良仕事のときなだれでもが口ずさむ。

♪ ラ・ラ・ライ・ララ・・・ ♪

よく通る大きな声だった。声の方へ行ってみると、二人の女の子が地面のコケを集めて竹かごへ入れていた。

「ナマステー」「ナマスティ」と挨拶をかわし、ヤクの餌にするのか、と聞くと、ちがう、たきつけにするんだと教えてくれた。

そのとき、突然一人が「ペンちょうだい」と僕に言ってきた。「えっ」と思って彼女の顔をみていると、ふたたび「ペンちょうだい」と彼女はくりかえした。

「Give me pen. か」と僕は心の中でくりかえし、今、自

高梨洋之

アイランド・ピークは、ローツェ・シャル(8400M)南西稜の末端からのびる、標高6189メートルのピークであり、8000メートル級の山々が林立するクーンブ山群においては小さな山といえる。しかしヒマラヤ遠征の経験のない我が部にとっては、山頂までの道程は非常に長く、困難を極めた。特に登攀技術の未熟さは大きな課題であった。その他にも、膨大な必要物資の輸送や、高度障害への対策にも頭を痛めた。また日々の生活にも窮している貧乏学生にとっては、その費用の捻出も問題の一つであった。時には挫折し、途方にくれることもあったが、遠征隊長の田村の下、メンバーがそれぞれの問題を一つづつ解決していった。遠征計画を広めるために新聞社の後援を受けたり、大学の教員の方々を訪問してカンパをつのったりした。部員のアルバイト先である長田病院では、医療、資金の両面からバックアップしていただいた。また、同時に富士山や八ヶ岳において、体力と登攀技術の錬成に努めるなど、本当に忙しい日々が続いた。

努力が報われてネパールに降り立った時は、本当にうれしかった。先発隊である私は、食糧や燃料などをもってジリから後発隊との合流点であるルクラまでキャラバンをするはずだったが、幸か不幸か細菌性の下痢に見舞われ、カトマンズまで引き返し、後発隊と一緒に飛行機でルクラへ向かうことにした。実際この腹痛で体力は当然として、気力までがすっかりそがれてしまった。しかし後発隊がカトマンズ入りするまでの一週間で、何とか体力を回復させることができた。

後発隊とルクラへむかい、先発隊の田村、ガイドのドルチェ、キッチン・ボーイのハクシーらと合流した。ナムチェ、タンボチェ、チュクンとすんなりキャラバンできたものの、4700メートルのチュクンで皆、どこかしら体調を悪くした。時間的に余裕がなかったためか、キャラバンを進めすぎたようであった。高度馴化の不足と、現地食の飽きによる食欲不振によって、高山病になったようである。幸いなことに私の高山病は軽く、ベース・

分は1本しかもっていない、と言いつつしてその場を去った。気が重かった。

と、そのとき、後ろのほうから、またあのよく通る声で彼女らの歌が聞こえてきた。

♪ ラ・ラ・ライ・ララ・・・ ♪

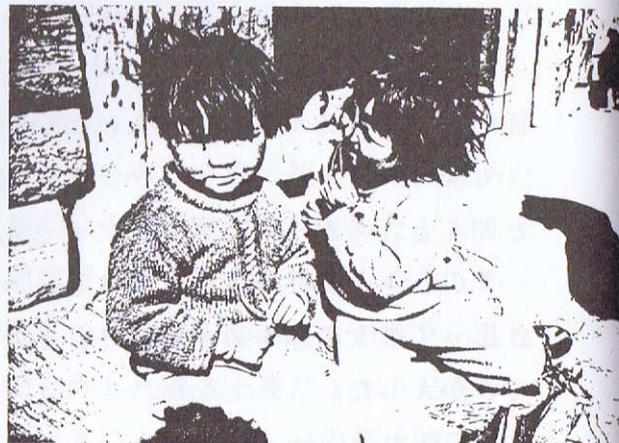
まるで僕という異国の人となどとは出会わなかったかのように、さっきまでと同じように、その牧歌は山々にひびきわたった。

♪ ラ・ラ・ライ・ララ・・・ ♪

空はどこまでも青く、雪を残した山々の間を、風は通りすぎる。

「それでいい」

与えられたものは、いつかは壊れる。だが、おまえたちが耕したその大地は、永遠におまえたちのものなのだ。



キャンプまではなんとか行くことができた。しかしさすがに5000メートル以上になると空気中の酸素は通常の二分の一であり、息苦しい。ベース・キャンプで、それまで一番元気だった小嶋が体調を崩して下山した。いよいよ田村と私だけになり、二人がアタック隊員となった。二人とも日本の登山歴はそこそこのものがあるが、6000メートルという未体験ゾーンを目の前にしてかなり緊張した。

当初アタック・キャンプをつくって、十分に高度馴化した上で、頂上をねらう予定だったが、予想以上に風が強く、アタック・キャンプ建設は難しくなった。そのためベースから一気に山頂を目指す方法をとらざるを得なくなった。まさしく神風アタッカーとなったわけであるが、仕方がなかったように思う。本当は登攀メンバー四人全員でのぼりたかったのだが、現実には厳しく、結局私だけが山頂に立つということになった。私の登頂成功は他のメンバーの協力の上に成り立つものであり、決して私だけの成功ではない。私はメンバーの代表として登ったにすぎない。

過程はどうであれ、探検部が創部して初めてヒマラヤの遠征に成功したのである。これは探検部だけでなく、横浜市大始まって以来のことらしい。アイランド・ピークはサガルマタ(エベレスト)やローツェなどに較べれば、たしかにたいした山ではないかもしれない。しかしこの遠征に成功することによって我が部は一つの壁を越えたと思う。これまで国内に限定されていた登山活動が、海外の山々までその行動範囲が広がった。またこの遠征のために、今までやっていなかった冬山での氷壁登攀をおこなうようになった。こう考えると、今回の遠征によって探検部はおおいに前進したように思う。私自身にしてみても、探検活動を締めくくるにふさわしい一大イベントであり、登頂に成功した時の感動と嬉しさは一生忘れることがないように思う。

我々が体験したことは、日々なんとなく生活しては絶対に味わうことができないものだ。周りの人たちは、わざわざ高い金をだして危険なことをしている我々を見て、不思議に思うかもしれない。馬鹿げたことをする愚か者と見ているかもしれない。しかし、私は日々をただ漫然とすご

すのは嫌であり、何か普通の人ができないようなことをやりたかった。そんな私にとって、ヒマラヤ遠征は本当に実りあるものであり、喜び深いものであった。

光輝く太陽を、キラキラと反射させる万年雪。真っ青でどこまでも透き通るようなコバルトブルーの空。そしてそこにそそり立つヒマラヤの山々。それらの景色とは対称的に、ベースキャンプはまるで、地獄か月面のように殺伐とした雰囲気のある所であった。

ヒマラヤは我々に、色々な顔を見せてくれた。我々はヒマラヤの雄大さに心うたれ、その懐の深さを身をもって体験した。その体験は、我々一人一人の心のなかに刻みこまれたであろう。そしてその自然に挑み、克服することこそが遠征の目的であり、登山の目的であるといってもよいのではないだろうか。

総括2

田村康一

この計画の目的は、登山と学術調査の二つであった。しかし、純粋な学術要員は大沢一人であり、残りのメンバーの主目標(特別参加の常世田は、BC入りを目標とした)はあくまで登山であったとおもう。大沢の調査報告に関しては、専門的なことなのでコメントを差し控え、ここでは登山活動を中心に、反省ならびに今後の課題について考察してみたい。

最初は、4人の登山隊員(田村、高梨、種子田、小嶋)全員が登頂できるようにと選んだアイランド・ピークであったが、結果的には高梨以外は山頂に立つことができなかった。高梨と他のメンバーとの間には、技術、体力的にみて際立った差はなく、やはり明暗を分けたのはベース・キャンプにおけるコンディションの違いだったと考えられる。

ジリからのキャラバンで、猛烈な下痢の洗礼をうけ、一時は途中帰国まで考えたという高梨であったが、カトマンズでしばらく休養してからベ

ース・キャンプに至るまで、尻上がりに調子を上げていった。最初は調子が良かったものの、ベース・キャンプ前後で相次いで体調を崩していった他の3人とは、その点で対称的であった。

高梨以外の3人が、ベース・キャンプで体調を崩してしまった原因は、十分な高度順化をおこなわないまま、キャラバンを進めてしまったことである。これは、卒業式を控えた4年生の帰国日を考慮したこと、現地での人件費の高騰により、停滞中のポーターに払う日当を惜しんでしまったことなど、要するにお金と時間が足りなかったことが、その背景である。お金も時間も、ないのは最初からわかっていることなので、そのような展開になるのは予想できたはずなのに、「なんとかなるだろう」とタカをくくっていたことは反省させられる。

さらに、高度を上げるにしたがって、現地食中心の食事が口にあわなくなり、体力の減退に拍車をかけていった。やはり高所登山の場合、民族探検のときのような現地食主義は極力避けるべきである。多少値は張っても、ふだん食べなれたものを日本からもってゆき、自分たちの口にあうような調理をすることが、高所で体調を維持するためには必要であると、今回の経験を通じて実感させられた。

このような悪条件のもとで、良い体調を維持するのは至難のわざであり、そんな中で一人山頂に立った高梨は、よくがんばったものだと関心させられる。彼が登頂に成功した理由は、①最初に腹をこわしたおかげで、現地の食事に免疫ができたこと。②ベース・キャンプ到着後、体調をくずした常世田につきそって、いったんチュクンまで下山し、翌日登り返して再びベース・キャンプ入りしたこと(高所では、初めて到達する高度に、いきなり宿泊するのは良くないとされている)。が、考えられる。つまり高梨は、他の3人が苦しんだ、食事、高度順化の二つの問題を克服し、アイランド・ピークの頂上を極めたのである。

しかし、高梨一人が登頂したからといって、手放しで喜べるわけではない。その他にも、今回気がついたいくつかの問題点について指摘しておきたい。

まず、今回の登頂が、シェルパの開いたルートに頼ってのものだった点である。アイランド・ピークは、途中のクレバス隊の通過と、山頂直下の氷化した雪壁(傾斜約55~60度)の突破以外に、技術的に難しいところはなく、事前に富士山での雪上訓練や、八ヶ岳におけるアイス・クライミングを経験していた程度の我々の力をもってしても、十分に対応できると考えていた。しかし、実際に登ってみると、高所において全く普段の力が発揮できず、シェルパに導かれるまま登っていたという有り様だった。やはり、ヒマラヤ登山の醍醐味は、山を見て、ルートを探しながら登ってゆくというところにある。いくら優秀な登山ガイドのいるネパールとはいえ、それに頼りきりになるのはどうであろうか。たとえ失敗しても、自分たちだけの力で挑んだ山の方がはるかに価値があるのではないかと、ふと考えさせられた。

つぎに、最初考えていた、アッタク・キャンプを建設してからの登頂、というタクティクスを簡単に放棄したこと。その理由については、別稿でくわしく説明してあるが、結果的に成功したものの、ベースからのラッシュ・アッタクは体力的にかなり無理があった。その証拠に、高梨と田村は、下山中疲れきって、ひとつ間違えれば、誤って滑落するかもしれないような状態であった。高所登山のスペシャリストであるガイドのドルチェでさえも、ふらふらの状態で下っていた。やはり、5000~6000メートルという、一番高度の影響が出やすいところを、順応しないままの状態で一気に登るのは、安全な方法とはいえない。

さらに、高梨が登頂した後、第2次、3次のアッタクをおこなわなかったことが大きな問題点としてあげられる。下山後、田村は、種子田からアッタクを断念するとの申し出を受け、ベースの撤収を決定した。小嶋は不服そうだったが、疲れきった高梨や田村の姿を見ると、「登らせてください」とはいえなかったようである。田村は、高梨の登頂をもってこの計画は一応成功したと判断し、「これ以上無理をして事故をおこしたら大変だ」という消極的な理由のもとに撤収をきめた。しかし今にして思えば、フィックス・ロープは残置してあったし、小嶋なり種子田なりが、アッタクを試

みた場合、条件さえよければ、かなりの確率で登頂に成功していただろうとおもわれる。かりに頂上までいけなかったとしても、二人は納得して山をおりることができただろう。

出発前の合宿で事故をおこし、周囲の反対を押し切ってヒマラヤにやってきた我々には、たしかに「絶対に事故はおこせない」というプレッシャーがあった。それが土壇場での消極的な判断につながったのかどうかはわからない。しかし、理由はどうあれ、全員が納得した山登りをするのができなかったのは、最終的な決断力をもつ、リーダーの責任によるものである。

以上、かなりシビアな反省になってしまったが、今までヒマラヤどころか、本格的な海外登山の経験もない我が探検部にとって、初めてのヒマラヤ登山で一応の成果をあげることができたのは、手前みそながら“画期的なこと”とって良いとおもう。あとは今回の反省を生かして、いかに内容のある登山をやっけてゆくかが、これからの課題であろう。残念ながら、今回のメンバーの中のほとんどが、この計画を最後に現役を引退してしまった。せめてこの報告書を通じて、我々のヒマラヤ経験が、後輩や今後同じようなことを志す人たちの参考になれば幸いである。

最後に、個人的なことを書かせてもらおう。山頂のわずか手前でずっけたり、リーダーとして適切な判断を下せなかったりと、あまり納得できる遠征ではなかったが、気の合った仲間同士でのヒマラヤは、最高に愉快的な旅だった。山頂直下の雪壁で、高梨が稜線の向こうの青々とした空に消え、登頂が確実になったときは、おもわずジーンときた。今でもそのときの空の色は、瞼に焼きついている。

このような素晴らしい体験ができたのも、良い仲間めぐまれたからであり、また、この計画を支援していただいた多くの方々のおかげだと、あつく感謝する次第である。

ヒマラヤへの憧憬

朝比奈大作（文理学部助教授）

探検部のヒマラヤ探検隊が、アイランド・ピーク登頂という朗報と共に、私への素晴らしいお土産をもってきてくれた。総計で50頭ほどの昆虫標本のことである。中間報告書によると、ピーク・ハントのみを目的とする遠征隊は“探検”部としては安易にすぎる、との意見があって、民族学、生物学の調査を目的に加えた、とある。他の主題については別にして、昆虫相の調査については、私が急遽、道具一式と採集メモを用意して送り出したのだから、全くの素人集団であって、正直なところほんのつけ足しの何か二、三の標本でも採ってきてくれればとごく淡い期待を抱いていたにすぎなかった。

それなのに、乾季の高地遠征であまり虫の姿を見かけなかったのに、と言いながら、小さハチ、アリ、ハエ類等を含めて（というよりもむしろ、そうした小昆虫を主に、といったほうがいいのだが）50余もの標本を持ち帰ってきてくれたのが私には大変嬉しかった。

もちろんこれだけの小さなコレクションが学術的な意味を持つ可能性は少ない。ヒマラヤの昆虫相はそれなりに調査が進んでいるのだし、数種の蝶と甲虫類を除けば、そもそも私自身に同定能力がなく、レポートすら書けないからである。専門家に同定を依頼するだけの価値もないだろうと判断して、有難く私のコレクションに含めさせてもらうことにしたわけである。

隊員に手渡した採集メモに、“私は虫を選ばないので、何でも採ってこい”と書いておいたのがちょっとした評判になったそうだが、そういう意味で私は専門家ではなく、従ってまた私のコレクション自体が学会に貢献できる可能性に乏しいのだけれど、それは私個人にとっては大きな意味を持っている。私は標本を買うことはしないので、私のコレクションの四分之三ほどは自分の手で採ったもの、残りはこの場合のように、

主として海外に出掛けた知人、友人に頼んで採ってきてもらったもの（卓上採集と称している）である。前者はもちろん、私の“思い出”を形成するコレクションであり、後者は未知の土地への“夢”を作り出してくれるコレクションである。

今回貰うことのできた小さなコレクションは、他に例のない特殊な（小昆虫中心の）採集品であるということで、私の標本箱の中で輝き続けるだろうし、時間が経てば当然ある種の“思い出”を増幅させることにもなるだろう。しかしそのことと同時に、私が若い頃に抱いていたヒマラヤへの憧憬を鮮やかに思い起こさせてくれた、そういう意味のあるものとして、私は大切にしたいと思っている。学生時代に横浜港から貨物船で“遠征”に出掛けた友を一種の嫉妬と共に見送り、そしてその友人が持ちかえてくれた若干の標本を貰い受けたことがあり、それらと今回の標本が同じ箱の中に並ん時に、私はその時の憧憬と嫉妬とを鮮やかに思い出したのである。

これら“2かたまり”の標本への私の思い入れが今後輝きを失うことはないだろう。海外旅行が当たり前になって、私もいつか憧れのヒマラヤの地をこの足で踏むことができるだろうが、その時までそれらは私の夢を育ててくれるだろうし、それから後は、（多分自分で採集した標本と一緒に）多くの思い出を暖めてくれることになるだろう。感謝の念をこめて、一筆記しておく次第である。

Himaraya, Dudh·kosi, Lobuche·kholaに
おける生物学的（水生昆虫・付着藻類）調査

大沢 啓志

はじめに

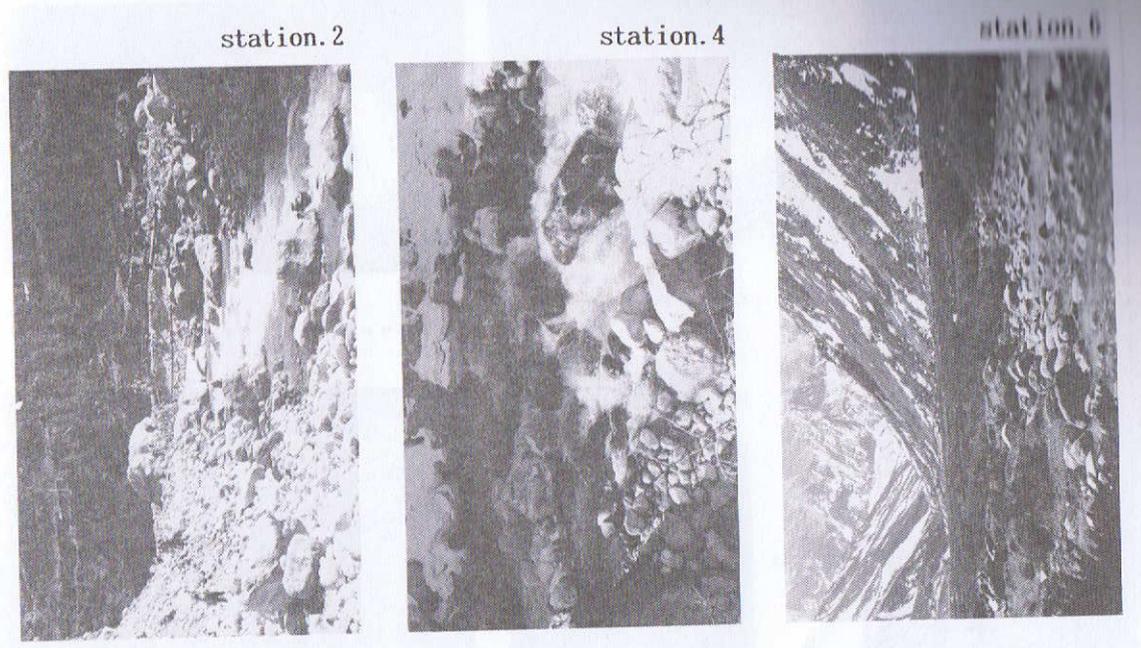
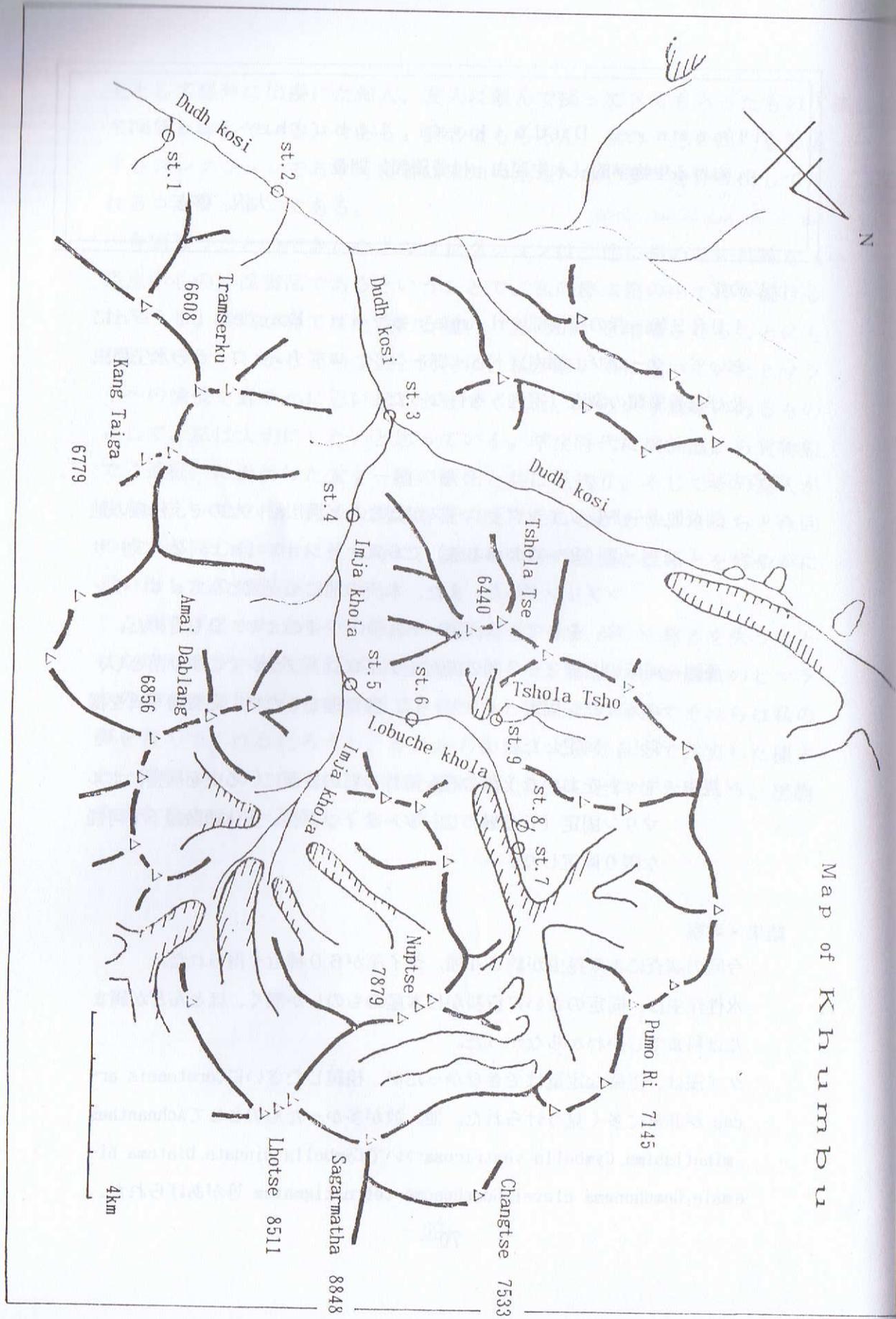
1989年・春の探検部・Himarayan Expeditionにおいて、クーンブ山郡内、ドゥード・コシ、ロブチェ・コーラの水生昆虫及び付着藻類の調査（定性）を行なった。

調査方法

- ・調査地点…トレッキング・コースがほとんど河川沿いなので、任意の地点（2～4 kmおき）で6ステーション（st. 2～7）サンプリングした。また、本流の他にも支流としてst. 1・8、そして、氷河湖・チョラ・ツオのst. 9も含めた。
- ・藻類…河床の石礫2～3個の表面をナイロン・ブラシでこすり落とし、ホルマリン固定（10%）し、酸処理をした後、顕微鏡写真を撮影し、同定した。
- ・昆虫…ネットをおいた上流の石を攪拌し石の表面にいる虫を捕獲、ホルマリン固定（50%）し、ソーティング後、実体顕微鏡下で可能な限り同定した。

結果・考察

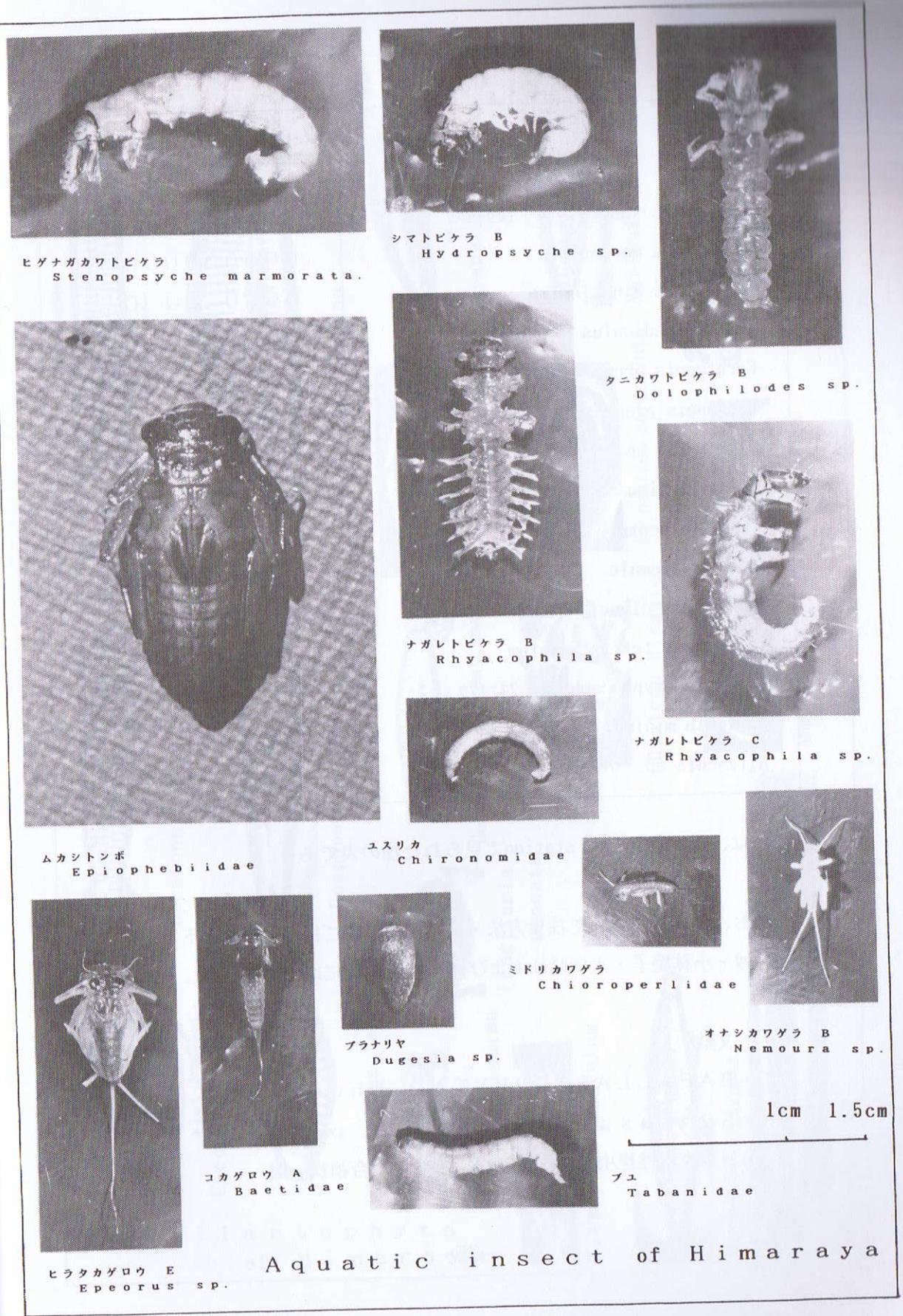
今回の調査により昆虫が約34種、ケイ藻が60種近く得られた。水性昆虫は、同定のさいに資料が日本産のものしか無く、ほとんどが属または科までしかわからなかった。ケイ藻は、正確な定量はできなかったが、検鏡したさいにCeratoneis arcusが非常に多く見うけられた。他、数が多かったものとしてAchnanthes minutissima, Cymbella ventricosaについてCymbella sinuata, Diatoma hiemale, Gomphonema clevei, Gomphonema tetrastigmatum等があげられた。



station NO.	Date	time	W.T(°C)	pH	標高(m)	川幅(m)
1	2/27	14:30	6.8	5.0	2700	3
2	2/28	11:30	5.5	5.5	2800	12
3	3/2	13:30	3.8	5.5	3200	10
4	3/8	9:30	1.0	5.0	3700	6
5	3/3	14:30	7.2	6.0	4100	5
6	3/7	11:00	3.8	4.5	4300	3
7	3/5	13:45	0.8	6.0	5000	12
8	3/5	14:30	1.8	4.5	4900	4
9 (Lake)	3/4	13:45	1.2	4.5	4500	0.5 (km ²)

		station NO. 1 2 3 4 5 6 7 8 9								
トンボ目	Epiophlebiidae	ムカシトンボ	○							
カワゲラ目	Oyamaia sp.	オヤマカワゲラ	○							
	Acroneuria sp.	モンカワゲラ	○							
	Nemoura sp. A	オナシカワゲラ	○							
	B		○○○							
	C		○○○○○	○						
	Chloroperlidae	ミドリカワゲラ	○							
	Capniidae	クワカワゲラ	○							
トビケラ目	Stenopsyche marmorata	ヒメナガカワトビケラ	○							
	Stenopsyche sp. A	シマトビケラ	○							
	B		○							
	Rhyacophila sp. A	ナガレトビケラ	○○							
	B		○○							
	C		○							
	Dolophilodes sp. A	タニカワトビケラ	○○○							
	B		○							
Goerodes sp.	コカクツツトビケラ		○							

		station NO. 1 2 3 4 5 6 7 8 9								
カゲロウ目	Ephemerella cryptomeria	ヨシノダラカゲロウ	○							
	Ephemerella orientalis	トウヨウダラカゲロウ	○							
	Epeorus sp. A	ヒラタカゲロウ	○							
	B		○							
	C		○							
	D		○							
	E		○○○○○							
	F		○							
	Baetidae A	ユカゲロウ	○○○○○○							
	B		○							
	C		○							
	Rhithrogena sp.	ヒメヒラタカゲロウ	○							
双翅目	Chironomidae	ムスリカ	○							
	Tabanidae	ブユ	○							
	Simuliidae	シムリア	○							
貧毛目	Tubificidae	イトミミズ	○							
三岐腸目	Dugesia sp.	ブラナリヤ	○							



ヒメナガカワトビケラ
Stenopsyche marmorata.

シマトビケラ B
Hydropsyche sp.

タニカワトビケラ B
Dolophilodes sp.

ナガレトビケラ B
Rhyacophila sp.

ナガレトビケラ C
Rhyacophila sp.

ムカシトンボ
Epiophebiidae

ムスリカ
Chironomidae

ミドリカワゲラ
Chloroperlidae

ブラナリヤ
Dugesia sp.

オナシカワゲラ B
Nemoura sp.

ユカゲロウ A
Baetidae

ブユ
Tabanidae

ヒラタカゲロウ E
Epeorus sp.

Aquatic insect of Himaraya

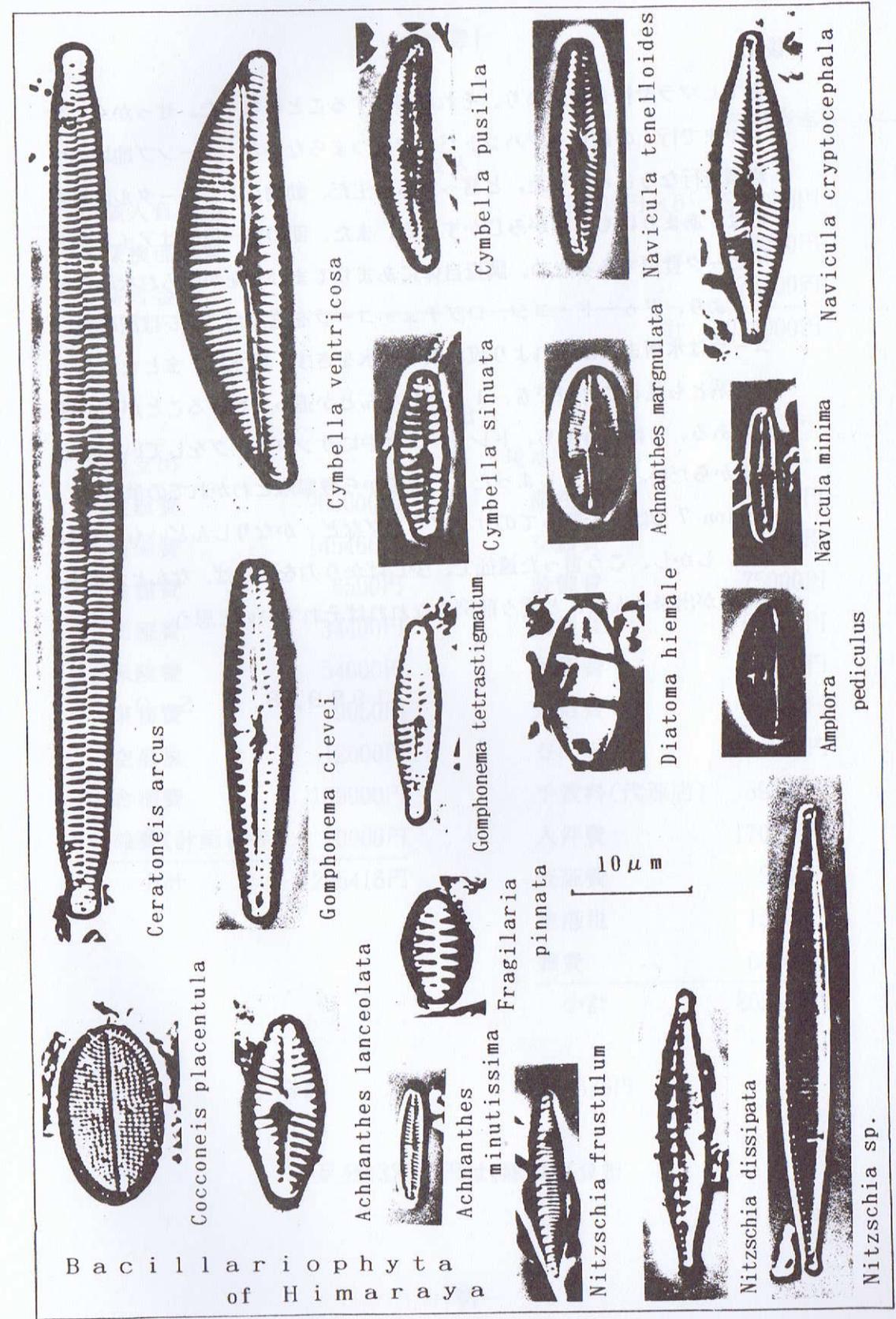
	station NO. 1 2 3 4 5 6 7 8 9								
Achnanthes lanceolata 7カリケイツウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Achnanthes margnolata	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Achnanthes minutissima	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Amphora pediculus ニセカビルケイツウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ceratoneis arcus ハケイツウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Cocconeis placentula コバンケイツウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Cyclotella sp. ヒメマルケイツウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Cymbella sinuata クサビルケイツウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Cymbella ventricosa	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Diatoma hiemale イタケイツウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Gomphonema clevei クサビケイツウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Gomphonema tetrastigmatum	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Navicula cryptocephala 7衦ケイツウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Navicula minima	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Nitzschia sp. ハケイツウ	0	0	0	0	0	0	0	0	0

これは、5カ所以上の stationで見られた種の表である。

なお、当調査において採集方法・試料整理等にご指導、ご協力下さった
福島博・小林艶子・大塚晴江および佐々木真一氏に厚くお礼を申し上げます。

文献

- ・BACILLARIOPHYTA Fhustedt
- ・Süßwasserflora A. pascher
- ・日本産水性昆虫検索図説 川合禎次 編



後記

部でヒマラヤ行きが決まり、それに参加することになった。せっかくヒマラヤまで行くのにピークハントだけではつまらないと、クーンブ地域の生物調査行なうことにした。と言っても植生だ、動物だと、トータルに見るには、あまりにも日程がみじかすぎる。また、部の第一目的はアイランド・ピーク登頂であるため、調査自体にあまりてまひまをかけられないことなどより、ドゥード・コシ、ロブチェ・コーラを選んだ。コシは河の意、コーラは氷河またはそれより流れ来る流水をさす。陸水は、まとまった1つの系とも見ることができ、1人でもなんとか追って行けることがその理由である。とは言っても、トレッキング中にサンプリングをしていたために隊からだいぶ遅れてしまったり、途中から登攀隊とわかれての単独行、station 7では氷を割ってのサンプリングなど、かなりしんどいものもあった。しかし、こう言った遠征で、少しばかり力をさけば、なんとか形あるものが出来るんだ、と言う前例になればそれでいいと思う。

1989, 8, 1 S. O

会計

大沢啓志

[収入]

個人負担金	250000円×6=1500000円
探検部部費	46000円
寄付金	478000円
	計 2024000円

[支出]

国内支出		現地支出	
渡航費	905000円	滞在費	320000円
装備費	145466円	交通費	52000円
食糧費	6500円	装備費	75000円
医療費	34400円	食糧費	60000円
保険費	54000円	医療費	220円
事務費	9050円	通信費	1400円
空港税	12000円	登山料	40000円
合宿費	109000円	手数料(代理店)	59500円
雑費(計画書等)	20000円	人件費	170000円
小計	1295416円	査証費	9000円
		空港税	15000円
		雑費	60000円
		小計	862120円

合計 2157536円

不足分133536円は、隊員が負担

